

イ號

此表治罪法第四百六十四條ニ依リ裁判言渡確定シ又ハ欠席裁判アリタル片共言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記之ヲ作ルモノトス但シ一葉一人ヲ記載シ(イロハ)ノ順序ヲ以テ氏名ヲ區別シテ之ヲ編綴シ探討ニ便スヘシ

表中ノ朱書ハ記載ノ一例ヲ示スモノナレハ(ロ)以下之ニ準スヘシ

一 刑名ノ條ヲ記スルニハ假令ハ重禁錮何年監視何月(自首若クハ酌量ニ據リ何等減)又ハ(再犯若クハ刑法何條ニ據リ何等加)ノ如ク加減或ハ再犯加重ニ係ル者ハ必ス之ヲ附記スヘシ若シ無罪及免罪ニ係ルモノアルハ證據不充分ニ付無罪又ハ期滿免除確定裁判ヲ經ルニ付免訴ト書スルカ如ク無罪ノ事由並ニ治罪法第二百廿四條第三以下各項ノ事由ヲ簡明ニ附記スヘシ

一 犯數ノ條ハ(舊法ニ據リ處斷何度新法ニ據リ處斷何度)ト區別記載スヘシ

(三十)

司法省達 十五年六月十六日丙第二十三號
裁判所書記官(東京府ヲ除ク)ハ
昨十四年丙第十九號(丁)第三十四號(十)達中自今違警罪事件表ハ三通ヲ差出シ輕罪裁判所
檢事ハ其一通ヲ備置ニ通ヲ差出シ控訴裁判所檢事長ハ又其一通ヲ備置豫審及輕罪事件表ハ
二通ヲ差出シ控訴裁判所檢事長ハ亦其一通ヲ備置各一通ヲ本省へ差出ス可シ此旨相達候事
司法省書記官通知 十二年八月二十六日
昨裁判所始審裁判所へ

重罪已決事件表進達方ノ義ニ付東京控訴裁判所檢事長ヨリ伺出別紙ノ如ク御指令相成候條
爲御心得此段及御通知候也

(別紙)

同 十六年二月廿二日

重罪已決事件表ノ義ハ治罪法第七十六條及十四年本省丁第三十四號達(十)中第六號表式ニ基
キ當職ニ於テ調製ノ上進達致シ來候處本年一月十一日付第七二號御内訓ノ趣キニ據リ始審
裁判所長判事及ヒ上席檢事ニ重罪裁判所ニ係ル一切ノ職務ヲ平常囑託致シ置タル以上ハ右
事件表調製ノ如キモ勿論囑託中ニ可有之果シテ然ラハ表式第六號官姓名記載ノ義ハ始審裁
判所長判事及上席檢事ニ於テ記名調印致シ而シテ該表進達方ハ該上席檢事ヨリ當職ヲ經由
シ本省へ差シ出スヘキモノト相考候何トナレハ輕罪違警罪事件表トモ治罪法第六十二條及
ヒ昨年本省丙第二十三號達等ニ據レハ當職ヲ經由スル手續キナルヲ以テ單ニ重罪事件表ノ
當職ヲ經由セサルノ理由無之依テ該重罪事件表ヲ始審裁判所上席檢事ニ於テ調製ノ上當
職へ差出シ當職ハ之ヲ取纏メ更ニ本省へ進達候義ト相心得可然哉

指令 伺之通

(四十)

司法省達 十八年十月二日丁第
十九號治安裁判所へ
本年九 第三十一號布告(一)ニ因リ裁判スヘキ違警罪ニ付テハ明治十四年十二月
月 當省丁第三十四

表式ノ部 け

號達(十)中第一號表式ニ準シ違警罪事件表ヲ調成スヘキ義ト心得ヘシ此旨相達候事
司法省達 十八年十月二日丁第
二十號治安裁判所へ

本年九月第三十一號布告(一)ニ因リ裁判スヘキ違警罪按件ハ總テ輕罪公判登記ノ例ニ準シ差出
ヌヘシ此旨相達候事
司法省達 十八年十一月五日丁
第二十三號裁判所へ

本年九月第三十一號布告(一)ニ依リ裁判スヘキ違警罪控訴事件ノ統計材料ハ總テ本年二月本省丁
第五號達(九)輕罪控訴登記簿ノ例ニ準シ差出ス可シ此旨相達候事
司法省達 十八年二月廿六日
丁第八號裁判所へ

自今輕罪ニ係ル控訴事件ニ付テハ明治十四年十二月當省丁第三十四號達(十)第五號表ニ據リ既
未決事件表ヲ調成差出ヌヘキ義ト心得ヘシ但輕罪裁判所ニ於テ受ケタル控訴事件モ同様ニ
該表ヲ調成シ他ノ事件表ト共ニ二ヶ月毎ニ取纏メ差出ヌヘシ此旨相達候事
司法省達 十八年三月二十六日
丁第十號裁判所へ

豫審終結ノ言渡ニ對シ故障申立ヲナシタル事件ニシテ會議局ニ於テ之ヲ取消シ更ニ免訴ノ
言渡ヲ爲シタルモノハ明治十五年丁第五號達(二)豫審處分第五表ノ例ニ照準製表シ故障事件
表ト共ニ差出ヌヘシ
司法省達 十五年十一月廿五日丙第三十三號始
審裁判所暨視察府廳(東京府ヲ除ク)へ

治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キタル片ハ本年當省丁第五號達(二)中檢事處分表雛形ニ準
シ檢事ノ職務ヲ代理スル警部ニ於テ之ヲ調成シ管轄ノ輕罪裁判所檢事ニ差出シ輕罪裁判所
檢事ハ之ヲ取纏メ共ニ差出ヌヘシ此旨相達候事
司法省達 十五年九月一日丁第
四十五號裁判所へ

重罪ト雖モ法律上ノ減輕ニ因リ輕罪以下ノ刑ニ處スヘキ者ハ輕罪裁判所ノ管轄ニ屬スル儀
ニ候處右ハ輕罪公判各表ニ據リ難キ場合アルヲ以テ此類ニ限リ重罪公判各表ノ例ニ準シ編
成シ輕罪各表ト共ニ差出ヌ儀ト心得ヘシ此旨相達候事
司法省達 十六年九月二十八日丁
第廿六號始審裁判所へ

豫審事件中被告人ノ屬籍氏名等分明ナラスシテ豫審終結ノ言渡ヲ爲ヌ能ハサル場合ニ於テ
期滿免除ニ至ル迄猶ホ豫審判事ノ手ニ留置クモノハ通常ノ未決件數ト混淆セサル爲メ明治
十四年丁第三十四號達(十)第二號豫審既決未決事件表中未濟ノ下及ヒ明治十五年ノ丁第五號
達(二)豫審第一表末段ニ於テ(豫審中止)ノ一區ヲ設ケ其件數ノミヲ記入スヘシ此旨相達候事
司法省達 十六年四月十二日丁第十四
號豫審裁判所始審裁判所へ

重罪裁判所ノ取扱ニ係ル各刑ノ執行及ヒ裁判費用徵收等ノ各條ハ明治十五年一月當省丁第
五號達(二)檢事處分第二表欄外ニ掲載アル執行以下各條ノ書例ニ據リ(舊法處斷ニ係ル者ハ實
際執行ノ刑名ヲ掲ケ共
下二人以テ記ス)毎年一月ヨリ十二月マテ右ニ係ル人員及ヒ件數ヲ取調翌年二月マテニ差出
ルテ書例ノ如シ)

表式ノ部 け

五百四十七

(八十)

(七十)

(六十)

(五十)

(四十)

(三十)

(二十)

(十)

(一)

ス可シ此旨相達候事

但十五年分ハ速ニ取調ヘ差出スヘシ又昨年ノ處分表一同既ニ進達候分ハ更ニ取調ニ及ハ
ス

(二廿)

司法省達 十五年十二月八日丁
第六十一號裁判所ヘ

本年六月大政官ヨリ第三十九號ヲ以テ御達アリタル如ク統計材料計査ノ忽セニヌ可カラサ
ルハ固ヨリ言ヲ待タヌ今般丁第六十號達ヲ以テ裁判所ヨリ重經罪登記簿ヲ徵集スル旨趣
モ亦裁判所統計材料點檢ノ方法ヲシテ益精取ナラシムルニ在ルナリ抑材料各條記載ノ明瞭
ニテ事實ノ正確ナルハ各廳表記擔任者ノ勤勞ニ因ラサル可ラス然モ各條採録ノ際裁判官若
クハ檢察官ニ就キ其事由ノ探討ヲ要スルコトアルヘシ故ニ其各員ニ於テモ亦表記擔任者ヨ
リ質問スルニ方リ正實ニ應答スルハ勿論ナリト雖モ尙ホ一層鄭重ニ注意スヘシ此旨相達候
事

司法省達 十五年七月十一
日丁第三十七號

本年五月丁第三十一二號達ヲ以テ相達候諸表野紙ハ本省ニ於テ摺立相渡候條紙數取調請求
方第九局ヘ可申出候事

但本文紙數ニ對スル費用ハ其廳經費ヲ以支拂候儀ト心得ヘシ

(三廿)

參照之部

(ふ) ○裁判所ノ官制ニ關スル事

勅令 十九年五月四
日第四十號

裁判所官制

第一 職員

第一條 本令中裁判所トアルハ治安裁判所始審裁判所重罪裁判所控訴院大審院及ヒ高等法
院ヲ總稱ス

裁判官トアルハ裁判所ノ長局長評定官判事及判事試補ヲ總稱シ檢察官トアルハ檢事長檢
事及檢事試補ヲ總稱ス

第二條 治安裁判所始審裁判所控訴院大審院ニ左ノ職員ヲ置ク

治安裁判所

判事 一人 奏任五等

判事試補 若干員

檢事試補 一人

勸解吏 一人 判任

書記 一人 判任

參照ノ部 〇裁判所ノ官制ニ關スル事

(一)

始審裁判所

長 一人 奏任一等乃至四等

判事 若干員 奏任 現任段ノ次等以下五等ニ至ル

判事試補 若干員

檢事 若干員 奏任二等乃至五等

檢事試補 若干員

書記 判任

控訴院

長 一人 勅任一等又ハ二等

評定官 若干員 奏任一等乃至四等

檢事長 一人 奏任一等

東京控訴院ニ限り勅任二等ノ評定官及檢事長ヲ置クコトヲ得

檢事 若干員 奏任二等乃至四等

書記官 一人 奏任四等

書記 判任

大審院

長 一人 勅任

局長 三人 勅任二等

評定官 若干員 勅任二等又ハ奏任一等乃至二等

檢事長 一人 勅任二等

檢事 若干員 奏任一等又ハ二等

書記官 一人 奏任四等

書記 判任

第三條 第十七條ニ指定スル局長勅任ノ評定官ヲ以テ之ニ充ツルノ外ハ奏任一等ノ評定官ヲ以テ之ニ充ツ

第四條 重罪裁判所及高等法院ノ職員ハ治罪法ノ定ムル所ニ依ル

第五條 裁判所ノ職員中定員ヲ限ラサルモノハ判任官ヲ除クノ外事務ノ繁簡ニ應シ司法大臣ノ閣議ヲ經テ定ムル所ニ依ル

第六條 試補ノ規則ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第七條 治安裁判所管轄區域内ニ執行吏ヲ置ク判任トス

第八條 裁判官及檢察官トナルノ資格ハ別ニ試験法ノ定ムル所ニ依ル

第九條 刑法第二編第四章第一節乃至第六節第九章第二節第二百八十四條乃至第二百八十

參照ノ部 フ〇裁判所ノ官制ニ關スル事

七條第三編第二章第一節乃至第六節ニ掲クル重輕罪ヲ犯シテ有罪ナリトノ言渡ヲ受ケ其
言渡ノ確定シタルモノハ裁判官及檢察官タルコトヲ得ス

第十條 大審院長局長評定官控訴院長檢察官及始審裁判所ノ長ヲ除クノ外裁判官及檢察官
ノ任所ハ司法大臣ノ定ムル所ニ依ル

第十一條 新ニ裁判官ニ任セラル、モノハ治安裁判所ニ於テ其職務ニ服シ治安裁判所裁判
官又ハ檢察官ニシテ一年以上其職務ニ服シタルモノハ始審裁判所裁判官ニ任スルコトヲ
得

裁判官檢察官ニシテ五年以上其職務ニ服シタルモノハ控訴院裁判官ニ任スルコトヲ得
裁判官檢察官ニシテ十年以上其職務ニ服シタルモノハ大審院裁判官ニ任スルコトヲ得

第十二條 裁判官ハ刑事裁判又ハ懲戒裁判ニ依ルニアラサレハ其意ニ反シテ退官及懲罰ヲ
受クルコトナシ

第二 分課及職務

第十三條 裁判所ノ權限及裁判官ノ所掌ハ訴訟法治罪法及其他法律命令ノ定ムル所ニ依ル
第十四條 治安裁判所裁判官ノ分課ハ訴訟事件ノ種類又ハ土地ノ區域ニ從ヒ一周年毎ニ所
轄始審裁判所長ノ定ムル所ニ依ル但治安裁判所ノ便宜ニ依リ其管轄ノ區域内ニ於テ臨時
分課外ノ職務ヲ行フコトアルヘシ

第十五條 治安裁判所裁判官ハ司法大臣ノ命ニ依リ其裁判所々在在外ニ於テ期日ヲ定メ法
庭ヲ開クコトアルヘシ

第十六條 始審裁判所裁判官ノ分課ハ一周年毎ニ始審裁判所長ノ上申ニ依リ訴訟事件ノ種
類又ハ土地ノ區域ニ從ヒ所轄控訴院長ノ定ムル所ニ依ル

第十七條 控訴院ハ民事刑事ノ類別ニ依リ須要ニ從ヒ數局ヲ置ク各局中ノ分課ハ一周年毎
ニ控訴院長ノ上申ニ從ヒ事件ノ種類又ハ土地ノ區域ニ從ヒ大審院長ノ定ムル所ニ依ル局
長及局員ヲ定限スルモ亦同シ但控訴院長ヲシテ院中一局ノ長ヲ兼テシメ自餘ノ局長ハ遞
次上席ノ評定官ヲシテ之ヲ兼テシム

第十八條 第十六條第十七條ニ指定シタル分課ハ其分掌ノ偏重ナルトキ又ハ其主任ニ缺員
若クハ引續キ差支アルトキニアラサレハ定期間之ヲ變更スルコトヲ得ス但前年ニ審理ヲ
始メ未タ終結セサル事件ハ從來ノ主任裁判官ヲシテ終結セシムルコトヲ得

第十九條 大審院ニ民事第一局民事第二局及刑事第一局刑事第二局ヲ置ク民事第一局ハ上
告事件ノ受理不受理ヲ審判シ民事第二局ハ受理シタル事件ヲ審判シ刑事第一局ハ刑法ニ
關スル上告事件ヲ審判シ刑事第二局ハ諸罰則ニ係ル上告事件ヲ審判ス
民事第二局ノ長ハ大審院長ヲシテ之ヲ兼テシメ評定官ハ司法大臣ノ上奏ニ依リ其各局分
任ヲ命ス

第二十條 治安裁判所裁判官差支アルトキ其職務ヲ代理スヘキモノハ一周年毎ニ所轄始審裁判所長ノ豫メ定ムル所ニ依ル若シ其裁判所ニ於テ代理スルモノナキトキハ最近ノ治安裁判所裁判官ヲシテ代理セシム

第二十一條 始審裁判所長差支アルトキハ上席ノ判事之ヲ代理ス

判事之差支アルトキハ其職務ヲ代理スヘキ順序ハ一周年毎ニ裁判所長ノ豫メ定ムル所ニ依ル若シ其裁判所ノ判事中代理スルモノナキトキハ所轄治安裁判所ノ裁判官ヲシテ臨時代理セシム

第二十二條 控訴院長差支アルトキハ上席評定官之ヲ代理ス

評定官之差支アルトキ其職務ヲ代理スヘキ順序ハ一周年毎ニ院長ノ豫メ定ムル所ニ依ル若シ其院ノ評定官中代理スルモノナキトキハ所轄始審裁判所裁判官ヲシテ代理セシム

第二十三條 大審院長差支アルトキハ上席ノ局長之ヲ代理ス

局長之差支アルトキハ其局上席ノ評定官之ヲ代理ス各局評定官中其職務ヲ代理スヘキ順序ハ一周年毎ニ院長ノ豫メ定ムル所ニ依ル

第二十四條 治安裁判所判事始審裁判所長控訴院長及大審院長ハ司法大臣ノ指揮ヲ受ケ其職務ヲ整理シ及司法ニ關スル行政ヲ掌理ス

第二十五條 大審院長ハ其院及控訴院ヲ監督シ控訴院長ハ其院及所轄裁判所ヲ監督シ始審

裁判所長ハ其裁判所及所轄治安裁判所ヲ監督ス

第二十六條 控訴院及大審院ノ局長ハ其局ノ所掌ニ屬スル裁判事務ヲ指揮ス

第二十七條 治安裁判所ヲ除クノ外裁判所ニ檢事局ヲ置キ檢察官ヲシテ治罪法及訴訟法ニ定ムル職務ノ外司法ニ關スル事項及司法ノ行政ニ關スル事項ニ付監督ノ職務ヲ行ハシム其處務ノ規程ハ別ニ定ムル所ニ依ル

治安裁判所ニ於テハ別ニ檢事局ヲ置カヌ檢事試補ヲシテ其所轄ニ屬スル檢察事務ヲ掌ラシム但檢事試補ヲ置カサルノ治安裁判所ニ於テハ警察官郡區長戸長ヲシテ檢察事務ヲ行ハシムルコトヲ得

第二十八條 各檢事局ノ管轄ハ其所在裁判所ノ管轄區域ニ依ル

第二十九條 檢察官ハ其職務上其所在裁判所ニ從屬セサルモノトス

第三十條 檢察官ニハ裁判官ノ職務ヲ行ハシムヘカラス又其職務ヲ監督セシムヘカラス

第三十一條 檢察官差支アリテ止ヲ得サル場合ニ於テハ裁判所長ハ司法大臣ノ認可ヲ承ケテ裁判官中ヨリ臨時代理ヲ命スルコトアルヘシ

第三十二條 大審院檢事長ハ所屬檢事及控訴院檢事長ヲ監督シ控訴院檢事長ハ所屬檢事及所轄内ノ檢事及司法警察官ヲ監督ス

第三十三條 檢察官ハ職務上其所屬長官ノ命令ニ服従スヘシ司法警察官ノ檢事ノ補助官ト

參照ノ部 〇裁判所ノ官制ニ關スル事

ナリタルトキモ亦同シ

第三十四條 始審裁判所檢察事局ニハ檢察長ヲ置カス上席檢察事ヲ以テ之ニ充テ始審裁判所及其所轄内ニ在ル治安裁判所ノ檢察事務ヲ指揮シ其局所掌ノ事務ヲ掌理セシム

第三十五條 控訴院檢察長ハ其局所轄ノ事務ヲ掌理シ其局及其所轄ノ檢察官ヲ指揮ス

第三十六條 大審院檢察長ハ其局ノ檢察ヲ指揮シ及其局所轄ノ事務ヲ掌理ス

第三十七條 控訴院及大審院ノ書記官ハ書記ヲ指揮監督シテ文書記録會計ノ事務ヲ掌ル

第三十八條 裁判所ノ書記ハ上官ノ指揮監督ヲ承ケ訴訟法治罪法及其他法律命令ノ定ムル所ニ依リ文書記録會計ニ従事ス

始審裁判所以上ノ裁判所ニ於テハ檢察事局ニ書記ヲ置ク其職務ハ前項ニ同シ

第三十九條 執行吏ハ治罪法訴訟法及其他法律命令ノ定ムル所ニ依リ文書ノ送達及判決命令ノ執行ヲ掌ル

第三 執務及休暇

第四十條 治安裁判所及始審裁判所ノ審理判決ハ裁判官一人ニテ之ヲ行ヒ控訴院ノ審理判決ハ主任局長ヲ合セテ裁判官二人大審院ノ審理判決ハ主任局長ヲ合セテ五人合議列席シテ之ヲ行フ

第四十一條 裁判ヲ爲スニハ前條ニ指定シタル主任裁判官ノ外列席スルコトヲ得ス但審問

數日ニ涉ルヘキトキハ其裁判所中自餘ノ裁判官ヲシテ立會ハシムルコトヲ得

第四十二條 裁判所ノ會議及議決ハ之ヲ公行セス其狀況及結果ハ一切之ヲ漏洩スルコトヲ許サス

第四十三條 合議列席シテ審理判決ヲ行フ場合ニ於テハ主任局長其會議ノ長トナリテ議事ヲ整理シ訴件ノ要點ニ就テ問題ヲ提出シ列席員ヲシテ各意見ヲ述ヘシム其問題ノ事項及提出ノ方法順序又ハ決議ノ査定ニ關シ各員ノ間ニ異見ヲ生スルトキハ列席員ノ最多數ヲ以テ之ヲ決スヘシ

第四十四條 決議ノ際各員異見ヲ述ルノ順序ハ各其任官ノ前後ニ依リ後任ノ裁判官ヨリ始メ局長ヲ最後トス任官ノ同日ニ係ルトキハ年少ヨリ始ム但專任ヲ命シタル事件ニ關シテハ其專任裁判官ヨリ之ヲ始ム

第四十五條 凡ソ裁判ハ過半數ノ決議ニ依リ之ヲ行フ
金額ニ關シ裁判官ノ意見三說以上ニ分レ其說各過半數ニ至ラサルトキハ過半數ニ至ルマテ最多額ノ意見ヨリ順次寡額ノ意見ニ合算ス

刑事ニ關シ有罪無罪ノ問題ヲ除クノ外其意見三說以上ニ分レ各過半數ニ至ラサルトキハ過半數ニ至ルマテ被告人ニ不利ナル意見ヨリ順次利益ナル意見ニ合算ス

第四十六條 大審院ニ於テ裁判前例ニ違ヘル裁判ヲ爲サントスルトキ又ハ司法大臣ノ諮問

參照ノ部 五〇裁判所ノ官制ニ關スル事

ニ應シ司法制度ニ關スル意見ヲ提出セントスルトキハ總會議ヲ開クコトヲ得
總會議ハ院中ノ裁判官三分ノ二以上ヲ以テ之ヲ開キ院長其會議ノ長トナリテ其議事ヲ整
理シ其議決ハ最多數ニ依ル若シ可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第四十七條 治安裁判所及始審裁判所ハ裁判上ノ處分ニ關シ互ニ補助ノ囑托ニ應スヘキモ
ノトス

第四十八條 檢察官其職務ヲ行フニ付必要ナル場合ニ於テハ互ニ補助ノ囑托ニ應スヘキモ
ノトス

第四十九條 書記又ハ執行吏他ノ裁判所ノ管轄内ニ於テ其職務上ノ處分ヲ爲スノ必要ナル
場合ニ於テハ互ニ補助ノ囑托ニ應スヘキモノトス

第五十條 裁判所ノ休暇ハ七月十一日ニ始マリ九月十日ニ終ル

第五十一條 休暇中ハ左ノ事件ニ限り裁判ス

- 一 刑事
- 二 差押事件
- 三 身代限ニ關スル事件
- 四 家宅ノ貸渡使用明渡及借家人ノ借宅ニ現存スル物品引留ニ付家主ト借家人トノ間ニ
生スル事件

五 爲換事件

六 養料ノ請求

七 既ニ着手シタル建築ノ繼續ニ關スル事件

以上事件ノ外ト雖モ原告若ハ被告ノ申立ニ依リ別段ノ至急ヲ要スルモノト裁判所ニ於テ
認定シタルトキハ之ヲ裁判スルコトアルヘシ

前諸項ノ事件ヲ裁判スル爲メニ裁判所長ハ休暇中臨時主任ノ局又ハ委員ヲ定ム可シ
關令 十九年五月
四日第十號

始審裁判所治安裁判所判事檢事ノ職務ハ當分ノ内現任判事補檢事補ヲ以テ之ヲ行ハシムル
コトヲ得其官等俸給ハ従前ノ通タルヘシ

司法省令 十九年七月一日丙
第八號裁判所へ

裁判所處務規程別冊ノ通相定ム

裁判所處務規程

裁判官

第一條 各裁判所ハ一年間各局又ハ各裁判官ノ每週開クヘキ訟廷ノ日割ヲ豫定シ廳内公衆
ノ知り得ヘキ場所ニ之ヲ揭示スヘシ

開廷ノ期日ニハ當日裁判スヘキ事件ヲ引續キ審理判決スヘシ

參照ノ部 〇裁判所ノ官制ニ關スル事

第二條 訴訟人呼出ノ時刻及審判ノ順序ハ訴訟人ノ便宜ヲ計リ各裁判官之ヲ定ムルコトヲ得

第三條 各裁判所ニハ認廷出勘簿ヲ設ケ裁判官ヲシテ開廷ノ時刻前之ニ押印セシメ局長又ハ裁判所長直ニ之ヲ調査シテ後檢印シ若シ闕勤者アルトキハ闕勤ノ理由及其結果ヲ出勘簿ニ記入ス但シ其抄録ハ裁判所ノ長毎月之ヲ司法大臣ニ進達スヘシ

第四條 裁判官文書ヲ受ケタルトキハ直ニ其處分方ヲ文書ノ餘白又ハ別紙ニ記載シ之ヲ書記ニ下附スヘシ

文書ノ處分一時ニ結了シ能ハサルトキハ後日提出ノ期限ヲ豫定シテ之ヲ書記ニ下附スヘシ

第五條 裁判書其他重要ナル文書ノ原按裁判官自ラ之ヲ作ルヘシ

第六條 裁判官差支アルトキ之ヲ代理スヘキ者ヲ豫定スルニハ其事務ニ妨ケナキヲ要スルヲ以テ成ルヘク差支アル者ト同日ニ認廷ヲ開カサル裁判官ヲ選ヒ置クヘシ

第七條 裁判官ノ分課ハ事件ノ種類又ハ土地ノ區域ニ依リ之ヲ定ムト雖トモ事務ノ繁閑ニ從ヒ甲局ノ裁判官ヲシテ乙局ノ事務ヲ兼掌セシムルコトヲ得

第八條 各裁判所(治安裁判所ヲ除ク)ニ於テハ其廳ノ行政事務ニ關シ裁判官總會議ヲ開クコトアルヘシ但シ檢事長又ハ上府檢事ハ其會議ニ出席シテ意見ヲ述フヘシ

總會議ハ過半數ノ裁判官出席スルニ非サレハ之ヲ開クコトヲ得ス其會議ハ裁判所ノ長ヲ以テ議長トス

第九條 總會議ニ於テ議スヘキ事項左ノ如シ

- 一 廳内ノ執事細則ヲ設定變更スル事
- 一 廳内雇員ノ取締規則ヲ定ル事
- 一 裁判區畫ノ變更ニ關シ司法大臣ニ意見ヲ述フル事
- 一 法律及諸規則ノ執行ニ關シ檢事長又ハ上府檢事ヨリ請求アリタル事項ヲ議決スル事
- 一 司法大臣ヨリ諮問ニ付シタル法律ノ草案ニ付意見ヲ述フル事
- 一 裁判所附屬吏員ノ組合ヨリ提出シタル意見ヲ審査スル事

第十條 控訴院ニ於テハ所轄裁判所ノ一般ニ遵守スヘキ司法省令及訓令ノ施行細則ヲ議定スル爲メ臨時總會議ヲ開クコトアルヘシ

第十一條 控訴院ハ毎年九月十五日(休暇日ナレハ翌日)ニ於テ總會議ヲ開キ前年八月ヨリ其年ノ七月迄一年間所轄裁判所ノ執リタル裁判事務ノ成績ニ關スル檢事長ノ報告ヲ聽キ匡正スヘキ弊害アレハ相當ノ處分ヲ評決スヘシ

第十二條 控訴院長始審裁判所長ハ十二月初旬ニ於テ總會議ヲ開キ其廳翌年中各裁判官ノ分課代理ノ順序及開區ノ日割ヲ豫定スル爲メ其意見ヲ論フヘシ

參照ノ部 〇裁判所ノ官制ニ關スル事

第十三條 控訴院始審裁判所ノ裁判官ニ職員アルトキハ十日以内ニ控訴院長其候補者二名

又ハ三名ヲ指定シテ司法大臣ニ具申スヘシ

書記官及書記ニ職員アルトキハ控訴院長檢事長ト協議連署スヘシ若シ協議ハサルトキハ各自ニ候補者ニ指定シテ具申スヘシ

始審裁判所ノ裁判官ニ職員アルトキハ其候補者ヲ指定スルニハ豫メ其裁判所長ニ書記ノ候補者ヲ指定スルニハ其裁判所長及上席檢事ニ諮問スヘシ

第十四條 治安裁判所ニ職員アルトキハ十日以内ニ裁判官ニ付テハ所轄裁判所長書記ニ付テハ上席檢事ト協議連署シ候補者二名又ハ三名ヲ指定シテ附屬控訴院長ニ具申スヘシ控訴院長ハ之レニ意見ヲ付シテ司法大臣ニ進達スヘシ但書記ニ付テハ檢事長ト協議連署シテ具申スヘシ

第十五條 前二條ノ場合ニ於テ裁判所ノ指定シタル候補者ノ取捨ハ司法大臣ノ權内ニアリトス

第十六條 控訴院長ハ檢事長ト協議シ司法大臣ノ名義ヲ以テ其廳及所轄裁判所判任官吏ノ増俸及轉勤ヲ攝行スルコトヲ得大審院長ノ其廳書記ニ於ケルモ亦同シ但始審裁判所及治安裁判所判任官吏ニ付テハ控訴院長豫メ始審裁判所長又ハ上席檢事ニ諮問スヘシ始審裁判所判任官其管内限ノ轉勤ハ裁判所長又ハ上席檢事之ヲ控訴院長又ハ檢事長ニ具

申スルコトヲ得

前各項ノ場合ニ於テハ攝行ノ後直ニ司法大臣ニ具申スヘシ

第十七條 裁判所ノ長ハ所轄裁判所裁判事務ノ正理ヲ視察スル爲メ其他必要ノ場合ニ於テ司法大臣ノ認可ヲ得管内ニ出張又ハ巡回スルコトヲ得但出張ニ付認可ヲ得ルノ暇ナキトキハ出張ノ後直ニ司法大臣ニ報告スヘシ

第十八條 裁判所ノ長ハ會計收支命令ノ事ヲ掌リ及會計事務ヲ勘査スヘシ

第十九條 控訴院長ハ會計事務ヲ勘査ノ爲メ其他必要ナル場合ニ於テハ書記ヲ所轄裁判所ニ出張セシメ又ハ所轄裁判所書記ヲ招喚スルコトヲ得

第二十條 裁判所ノ長ハ各其主掌ニ係ル諸表ノ調製ヲ管理シ司法大臣ニ進達スヘシ

第二十一條 裁判所ノ長ハ其廳ノ印章ヲ調製シ其印影ヲ司法省ニ進達スヘシ但シ治安裁判所ノ判事ハ所轄始審裁判所長ノ許可ヲ得テ調製スヘシ

第二十二條 裁判所ノ長ハ其廳經費定額内ニテ雇員ヲ使用スルコトヲ得但シ治安裁判所判事ハ所屬始審裁判所長ノ許可ヲ得テ之ヲ使用スヘシ

第二十三條 控訴院長ハ其廳及所轄裁判所ノ職員(勅任官)ニ對シ司法大臣ノ名義ヲ以テ除服出任ヲ命ジ及例規ノ賜暇ヲ許否スルコトヲ得

參照ノ部 〇裁判所ノ官制ニ關スル事

第二十四條 始審裁判所長ハ其廳及所轄治安裁判所職員(檢察官)ノ考績ニ付毎年八月所屬
控訴院長ニ報告ヲ爲ス可シ但シ書記以下ニ付テハ上席檢事ト協議スヘシ
控訴院ノ長ハ其廳及所轄裁判所職員(檢察官)ノ考績ニ付毎年九月司法大臣ニ報告ヲ爲ス
ヘシ但シ書記官以下ニ付テハ檢事長ト協議スヘシ

第二十五條 始審裁判所長ハ檢事ノ意見ヲ論ヒ毎年其廳裁判官中ヨリ豫審掛ヲ指名シ司法
大臣ニ具申スヘシ

第二十六條 始審裁判所長ハ治安裁判所々在地外ニ法廷ヲ開クコトヲ必要ト認ムルトキハ
司法大臣ニ具申スヘシ

第二十七條 始審裁判所長治安裁判所判事ハ書記ノ分任ヲ定メ書記數名アルトキハ一名ヲ
書記長ニ命スルコトヲ得

第二十八條 裁判所ト中央官廳トノ間ニ往復スル文書ハ總テ司法大臣ヲ經由スヘシ
第二十九條 始審裁判所長治安裁判所判事ヨリ司法大臣ニ稟スヘキモノハ總テ監督上官
ヲ經由スヘシ但シ特別ナル場合ハ直ニ司法大臣ニ稟報告スルコトヲ得

第三十條 第三條第二十條ニ定メタル裁判所長ノ職務ニ關スル規則ハ治安裁判所判事ニモ
亦之ヲ適用ス

第三十一條 裁判所官吏ノ事務取扱ニ對スル控告ハ其監督上官之ヲ判定シ最終ノ控告ハ司

法大臣之ヲ判定ス

檢察官

第三十二條 檢事ハ檢事長ノ代理者タルヲ以テ其特別委任ヲ俟タヌシテ各自其本務ヲ行フ
コトヲ得但シ檢事數名アルトキハ檢事長ハ裁判所ノ事務分課法ニ依リ檢事ノ分任ヲ定ム
ルコトヲ得

第三十三條 檢事ニ分任シタル事件ト雖モ被告人ノ身分又ハ事件ノ性質ニ依リ重大ナルモ
ノハ檢事長自ラ之ヲ取扱フヘシ若シ自ラ取扱フコト能ハサル場合ニ於テハ特別ノ注意ヲ
要ス

又左ニ記載スル書類ノ原按及正本ニハ檢事長ノ署名捺印ヲ要スルモノトス

- 一 重罪公訴狀
- 一 告訴告發ヲ受ケタル事件ニ付起訴ヲ爲サ、ルノ通知書
- 一 監督上官ニ差出スヘキ書類
- 一 上訴再審哀訴ニ關スル書類
- 一 特赦ノ上申書
- 一 檢事ノ處分ニ對スル控告ノ判定書
- 一 中央官廳及地方廳トノ往復書類

参照ノ部 ふ○裁判所ノ官制ニ關スル事

第三十四條 控訴院檢察長ハ管内代言人ノ取締上必要ト認ムル規則ヲ設ケ之ヲ告達スルコトヲ得

始審裁判所上席檢事ハ管内代言人ヲ監督シ其能否ニ附隨時控訴院檢察長ニ報告ヲ爲シ控訴院檢察長ハ之ヲ司法大臣ニ報告スヘシ其名簿ニ變更アルトキモ亦同シ

第三十五條 檢事其所在地外ニ隨檢スヘキトキハ檢事長ノ許可ヲ受クヘシ

第三十六條 控訴院檢察長ハ司法大臣ノ命令又ハ認可ヲ得テ管内ヲ巡視シ法律命令ノ執行ニ關スル利弊ヲ監査スヘシ

又檢事長ハ必要ナル場合ニ於テ司法大臣ノ認可ヲ得隨時管内ニ出張シ又ハ管内ノ檢事ヲ招喚スルコトヲ得但シ時機急迫ニシテ認可ヲ得ルノ暇ナキトキハ出張又ハ招喚ノ後速ニ其旨ヲ具申スヘシ

第三十七條 檢察官ハ其監督上ノ職務ニ付隨時司法大臣ニ機密報告ヲ爲スヘシ

第三十八條 始審裁判所ノ上席檢事ハ毎年八月其所在裁判所及治安裁判所ノ前一ケ年間取扱ヒタル事務ノ擧否及其弊害ヲ匡正スルノ方法ヲ所屬控訴院檢察長ニ具申スヘシ

第三十九條 控訴院檢察長ハ毎年九月十五日ニ開クヘキ總會議ノ席ニ於テ管内裁判所ノ前一ケ年間取扱ヒタル事務ノ擧否及其弊害ヲ匡正スルノ方法ヲ演說スヘシ

第四十條 前條演說ノ書記ハ九月下旬ニ之ヲ司法大臣ニ進達シ及所轄裁判所ニ送致スヘシ

第四十一條 第四條第十三條第十四條第二十條第二十一條第二十二條第二十三條第二十四條第二十八條第二十九條第三十一條ニ定メタル規則ハ檢察官ニモ亦之ヲ適用ス

附則

第四十二條 始審裁判所支廳ノ上席判事ハ本規程ニ照準シ其廳及管内ノ行政事務ニ付キ本廳長ノ代理ヲ爲シ其上席檢事ハ本廳上席檢事ノ職務ヲ行フモノトス但シ控訴院長檢事長又ハ司法大臣ニ進達スヘキ文書ハ本廳ヲ經由スヘシ

司法省達番外 十七年十二月十三日大審院裁判所ハ

大審院裁判所職員考績條例左ノ通相定候條此旨相違候事

大審院裁判所職員考績條例

第一條 考績ハ判事檢事以下職員ノ功過行能ヲ考覈シ司法卿ノ銓定ニ供スルモノトス

第二條 考績ノ法四善十最三殿ト爲ヌ其目左ノ如シ

- 一 操心公正ナルヲ一善トス
- 一 制行廉潔ナルヲ一善トス
- 一 學識博高ナルヲ一善トス

參照ノ部 〇裁判所ノ官制ニ關スル事

一職務勉勵ナルヲ一善トス

以上四善

一法理ニ精ク事體ニ達シ明晰嚴肅職務整理シ所部ヲ獎勵シ兼テ人望アルヲ院長所長ノ最ト爲ス

一法令ヲ遵奉シ所部ヲ監視シ明敏勇毅能ク職務ヲ盡シ兼テ人望アルヲ檢察長ノ最ト爲ス

一聽訟聽敏與奪理ニ當リ判文伸暢ナルヲ民事掛判事ノ最ト爲ス

一審理情ヲ盡シ裁決法ニ適シ判文伸暢ナルヲ刑事掛判事ノ最ト爲ス

一糾問敏詳舉證明確判文伸暢ナルヲ豫審判事ノ最ト爲ス

一搜查精密起訴嚴明良ヲ扶ケ奸ヲ懲シ法律ヲ保護シ公安ヲ維持スルヲ檢察ノ最ト爲ス

一忠恕倦マヌ懇篤勸解シ能ク治安ヲ保維セシムルヲ解勸判事ノ最ト爲ス

一記録詳明文理通達簿冊整頓處務敏捷兼テ書算ヲ善クスルヲ書記ノ最ト爲ス

一清白強幹書算ヲ能クシ出納ヲ謹ミ帳簿ヲ整ヘ勘査明確ナルヲ會計屬ノ最ト爲ス

一供承懈ラス職掌欠クルコナキヲ附屬員ノ最ト爲ス

以上十最

一愛憎情ニ任セ處斷法ニ違フヲ一殿トス

一公ヲ忘レ私ニ徇ヒ職務廢欠アルヲ一殿トス

一語訛名ヲ求メ巧詐貪汚ナルヲ一殿トス

以上三殿

第三條 院長所長檢察長始審廳ハハ各其廳及ヒ管轄廳ノ職員ヲ監視シ其功過行能ノ實ヲ精

密調査シ左ノ雛形ニ照準シテ功過明細書ヲ作り毎年九月司法卿ニ上申ス可シ

大審院又ハ
何裁判所 職員功過明細書

族籍

官 氏 名

年齢

一奉職年月日 本年本月迄何年何月

一赴任年月日 全上

一現時爵位勳等俸給

但何年何月増俸

功ノ部

一此部ニハ專ラ職務上ノ功績ニ係ル事件ヲ記ス即チ勤勉年勞事務練達裁判允當公訴嚴正庶務整理會計精確ノ類ナリ

過ノ部

參照ノ部 〇裁判所ノ官制ニ關スル事

一此部ニハ專ラ職務上ノ過愆ニ係ル事件ヲ記ス即チ怠慢、欠勤、誑諛、貪穢、事務延滞、裁判不法、起訴錯誤、庶務紛雜、會計無度、其他會テ懲戒ヲ受タルノ類ナリ

行ノ部

一此部ニハ專ラ品行ノ善惡ニ係ル事件ヲ記ス即チ性質ノ忠邪、制行ノ良否、交際ノ得失、活潑、慎重、健康、病患、驕奢、淫佚、其他人望ノ有無、親族ノ關係、及ヒ負債重積、屢訴訟ヲ受クルノ類ナリ

能ノ部

一此部ニハ專ラ學識才藝ニ係ル事件ヲ記ス即チ法律、經濟、文學等、諸般ノ學科ヲ修メ及ヒ其學位ヲ有シ又ハ才力、敏智、決斷、辨舌、書算ヲ善クシ、其他外國語ニ通シ、外國文ヲ綴ルノ類ナリ

備考ノ部

一此部ニハ前四部中ニ記載セザル事項ヲ記ス即チ本人ノ技量、民刑及ヒ檢察事務ノ適否、交際ノ摸樣、其他學業ノ教授、若クハ著述等ノ類ナリ
右註狀ノ通確實ナルニ依リ此段上申候也

大審院長又ハ何裁判所長
又ハ檢事長檢事

年月日

官氏名

(一) ○行政裁判ニ關スル事

司法省布達

十四年八月六日
日甲第四號

從來人民ヨリ郡區長及戶長ノ職務上ニ對スル訴訟ハ各上等裁判所ニ於テ受理審判致シ候處自今地方裁判所ニ於テ受理審判候條此旨布達候事

但受理審判等ノ手續ハ是迄各上等裁判所ニ於テ取扱ヒ候振合ニ可準候事

司法省達

十四年八月五日丁
第九號地方裁判所

人民ヨリ郡區戶長ニ對スル訴訟取扱方今般甲第四號(一)ヲ以テ布達候ニ付テハ是迄上等裁判所并ニ大審院へ相達置候諸達書別紙六通回附候條此旨相心得ヘク事

第五號

九年一月二十日

人民ヨリ院省使府縣ニ對スル訴訟ニ付明治七年第廿四號ヲ以テ相達置候處右ハ行政司法ノ裁判權限ニ於テ猶混淆ヲ免レサル義モ有之候ニ付追テ御規則相立候迄右ニ關スル訴訟ハ總テ本省へ何出指令濟ノ上受理可致候此旨相達候事

丁第二十四號

十一年六月廿九日

行政裁判云々ノ義本年五月八日丁第十三號ヲ以テ相達候處右ハ取消候條自今行政裁判ニ屬スル分ハ官府ヨリ償還スヘキ條理アルト否トニ拘ハラヌ總テ裁判見込案ヲ以テ具上申稟ス

參照ノ部 ○行政裁判ニ關スル事

五百七十一

ヘキ儀ト可心得事

但司法裁判ニ屬スル者ハ七年第廿四號當省達第三號ノ通タルヘキ事

番外 十一年十一月十日

官廳ヲ相手取リ訴へ出ルモノハ從前政府トノニ相認ル節ハ官衙ヲ指定シ候様可爲致此旨相

達候事

番外 十二年五月廿七日

人民ヨリ院省使府縣ニ對スル訴訟ニ付何書差出候該件訴狀或ハ決按等正本一通差出候向有之候處自今都ヲ寫一通相添可差出候此旨相達候事

丁第十五號 十二年六月十四日

人民ヨリ院省使等ニ係ル訴訟ニ付指令濟審理中解訟致シ候モノ又ハ司法裁判ニ歸シ官府ノ勝訴訟ト成リシモノ有之節ハ其都度可届出此旨相達候事

但已ニ本文ノ件アリテ未タ届出サルモノハ取纏メ届出ツヘシ

丁第十九號 十二年七月廿九日

人民ヨリ院省使府縣等ニ對スル訴訟ニシテ太政官ノ裁令ヲ經テ裁決セシムル者ハ自今本省ヨリ其旨ヲ附記シテ指令ニ及候條其裁判所ニ於テモ右申渡ヲ爲セシ時ハ其都度其趣(何某ヨリ何某ニ係ル何々ノ件ハ何年何月何日太政官ノ裁令ヲ經テ裁決セシ旨ヲ記ス)大審院ヘ

通報ニ及置クヘシ此旨相達候事

但本文ノ件ニ就テハ本人不服ヲ唱へ上告ノ届ヲ差出ストモ別ニ大審院ヘ書類遞送スルニ

及ハス候事

司法省達 十五年四月十四日丁第二十五號始審裁判所
始審裁判所ノ權限ヲ有スル治安裁判所ヘ

人民ヨリ郡區戸長ニ對スル訴訟取扱方ノ義昨十四年丁第九號^{前出}ヲ以テ相達候中明治十二年

丁第十九號各上等裁判所ヘノ達ニ(前略)右申渡ヲ爲セシ時ハ其都度其趣(何某ヨリ何某ニ係ル何々ノ件ハ何年何月何日太政官ノ裁令ヲ經テ裁決セシ旨ヲ記ス)大審院ヘ通報ニ及置

クヘキ旨有之右ハ自今此達ニ照準シ管轄控訴裁判所ヘモ其都度無遺漏可及通報此旨相達候

事

司法省達 十五年四月十四日丁第廿六號控訴裁判所ヘ

別紙一通始審裁判所及ヒ始審裁判所ノ權限ヲ有スル治安裁判所ニ相達候條本人控訴ノ節ハ

右ニテ受理不受理ノ義識別可致此旨爲心得相達候事

(別紙ハ丁第廿五號前出)

司法省達 十五年三月一日丁第廿五號始審裁判所ヘ

人民ヨリ郡區戸長ニ對スル訴訟取扱方ノ義ニ付明治十四年丁第九號^{前出}モ有之候處受否又ハ判決案伺出ノ際往々不都合ノ向モ有之候條右伺出ノ節ハ原被告ヨリ差出シタル訴答書

参照ノ部 乙〇行政裁判ニ關スル事

(三)

ハ勿論一切ノ書類正本一通及ヒ謄寫ノ副本一通合セテ二通并ニ判決案モ正副二通相添可差
出義ト可心得此旨相達候事

司法省達 十五年九月二十一日丁第
四十九號大審院裁判所へ

官府ヨリ人民ニ對スル詞訟ノ控訴受否伺ノ義ニ付別紙ノ通名古屋控訴裁判所ヨリ伺出朱書
ノ通及指令候條爲心得此旨相達候事

但本文達ト抵觸セル從前ノ指令内訓ハ取消ス

(別紙)

伺

人民ヨリ院省府縣等ニ對スル訴訟ハ明治九年一月第五號^{前出}御達ニ依リ總テ本省へ伺出御指
令ヲ待テ受理致シ候義ハ勿論ニ候處爰ニ初發院省府縣等ヨリ人民ヲ被告トシテ始審裁判所
へ起訴シタル詞訟其始審裁判所ニ於テ之ヲ受理裁判シタル處該裁判ニ對シ不服ノ旨ヲ以テ
人民(始審ノ被告ニシテ即チ始審裁判ノ曲者)ヨリ院省府縣(始審ノ原告ニシテ即チ始審裁
判ノ直者)ヲ控訴被告ト爲シ控訴スル時ハ尙ホ前顯御達ニ準據シ經伺ノ上受理スヘキモノ
ニ可有之哉

(朱書)

指令

(一)

伺之趣經伺ニ及ハサル義ト心得ヘシ

○民事ニ關スル事

布告 十四年十二月廿
八日第八十三號

治安裁判所及ヒ始審裁判所ノ權限左ノ通制定ス

第一條 治安裁判所ハ訴訟事件ヲ勸解ス但諸官廳ニ對スル事件及ヒ商事ニ係リ急速ヲ要ス
ル事件ハ勸解スルノ限ニ在ラス

第二條 治安裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價額百圓未滿ノ訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス

第三條 治安裁判所ハ人事其他金額ニ見積ル可ラサルモノヲ裁判スルヲ得ス

第四條 始審裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價額百圓以上並ニ第二條ニ揭ケタル治安裁判所權外
ノ訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス

第五條 始審裁判所ハ其管轄地内ノ治安裁判所ノ治審裁判ニ對スル控訴ニ付終審ノ裁判ヲ
爲ス

但控訴ノ手續ハ明治十年第十九號布告控訴手續ニ照準スヘシ

布告 十五年一月廿
八日第五號

明治十四年十二月^{前出}第八十三號^出ヲ以テ民事裁判權限ノ義布告候處當分ノ内西郷相川豐岡洲本
田邊脇町高山平戸福江巖原天草大曲八戸大島治安裁判所ニ於テ民事ノ訴訟ハ始審裁判所ノ

參照ノ部 〇民事ニ關スル事

權限ヲ以テ裁判スヘシ

但請求ノ金額及ヒ價額百圓未満ノ件ニ關スル控訴ハ管轄始審裁判所ニ之ヲ爲スヘシ
司法省内訓 十六年四月七日 各裁判所へ

民事裁判言渡ノ義ハ從來慣例モ有之事實及法律(習慣條理ヲモ包含シテ云フ)ニ依リ其判定ノ理由ヲ明示スヘキモノタルハ勿論ナリト雖モ近來或ハ其理由ヲ明示セサル者有之哉ニ相聞ヘ甚タ不都合ノイナリトス若シ裁判ニシテ其理由ヲ明示セサル時ハ是非曲直モ何ニ由テ然ルヤ了知スヘキヲサレハ原被兩造ヲシテ之ニ甘服セシムルニ足ラヌ管ニ裁判ノ本旨ニ乖クノミナラス右慣例ニモ相反シ遂ニ裁判ノ信用ヲモ失フニ至ラントス此等兼テ裁判官ニ於テ心得アルヘキヲナレハ猶一層注意可致此旨及内訓候事

內務省達 十八年七月廿八日甲第廿六號 警視廳府縣東京府ヲ除クヘ

民事上裁判執行ヲ遂ケサル者アルトキハ權利者ヨリ執行命令書ノ下付ヲ請求スル場合ニ於テハ裁判所ハ嚮ニ權利者ニ下付シタル裁判言渡書寫ノ末尾ニ左式ノ如キ命令書ヲ添付シ契印ヲ捺シ下付スヘキ等ニ付權利者ニ於テ之ヲ提供シ義務者所轄ノ警察署ニ願出ルトキハ警察官ニ於テ別ニ裁判所ノ照會ヲ須ダス直ニ義務者ヲシテ該裁判ノ通執行セシメ候様可致此旨相達候事

執行命令書

當裁判所ハ誰某ヨリ誰某ニ對スル何々事件ニ付大審院(某控訴裁判所)(某始審裁判所)(當裁判所)ノ與ヘタル此裁判ノ執行ヲ命令スル者也

明治年月日

某始審(治安)裁判所印

警保局長(通) 十八年九月十日

民事上裁判執行之義ニ付本年七月廿八日當省甲第廿六號出ヲ以テ達相成候處右ハ權利者ヨリ命令書ヲ提供出願スルモノハ如何ナル場合ヲ問ハス都テ警察官ヲシテ執行セシムルノ趣旨ニ無之物品ノ引渡若クハ建造物取毀等ノ如キ公力ニ依リ之ヲ執行セシムヘキ事件ヲ指シタルモノニ有之候間右趣旨ニ據リ御取扱相成度此段及御通候也

警保局長(知) 十九年四月二十七日

民事上裁判執行ノ義ニ付昨年十八年九月十日及御通知出候次第モ有之候處該文中ノ物品トハ裁判ニ於テ引渡スヘキモノト確定シタル封金公債證書地券預證書等總テ含蓄スル旨趣ニ有之候條爲念及御通知候也

司法省達 二十三年十二月廿七日丁第 二十八號大審院裁判所へ

民事裁判上呼出人ノ地名人名等ヲ誤寫スルニ因テ生スル失費ノ義ニ付別紙ノ通太政官へ相候處朱書ノ通御指令相成候條此旨爲心得相達候事
同 十三年十一月十七日

參照ノ部 〇民事ニ關スル事

五百七十七

(四)

(三)

(二)

民事裁判所ニ係リ受付係等ノ書記其呼出人ノ地名人名等ヲ誤寫スルニ因テ生スル失費ノ義ニ付明治十年九月一日附ヲ以テ別紙ノ通相伺朱書ノ如ク御裁令有之爾來其書記ニ任シタル者ヲシテ辨償爲致來候處右辨償ノ義務ハ固ヨリ主任者ノ負擔タルヘキハ當然ノ道理ナルヘシト雖モ本邦未タ一般ニ官吏辨償ノ費ニ任スルノ規則相立サルヲ以テ官吏ノ失誤ヨリ起ル職務ニ關スル損害ハ其主任者奉仕スル所ノ應費ニテ償却シ其官吏ハ相當ノ懲戒ニ處スル方穩當ナルヘシ且刑事裁判上ニ係ル前全權ノ償ハ總テ官費ニ相立候成規ニ有之候間均シク官吏ニシテ職務上ノ失誤ナルニ取扱全一ニ相成ラス候テハ障礙不抄候條依テ自今民事上ニ係ル誤寫ト雖モ明治九年第六十三號公布ノ官吏其人名ヲ誤寫スル等ニテ呼出シタル者云々ノ成規ニ準シ取扱可然哉

(朱書)

指令 十三年十二月十八日

伺之通

て ○登記法ニ關スル事

法律十九年八月十日第一號

登記法

第一章 總則

(一)

第一條 地所建物船舶ノ賣買讓與賃入書入ノ登記ヲ請ントスル者ハ本法ニ從ヒ地所建物ハ

其所在地船舶ハ其定繫場ノ登記所ニ登記ヲ請フ可シ

第二條 地所建物船舶ノ賣買讓與賃入書入ノ登記ハ始審裁判所長之ヲ監督ス可シ

第三條 登記事務ハ治安裁判所ニ於テ之ヲ取扱フモノトス治安裁判所遠隔ノ地方ニ於テハ

郡區役所其他司法大臣指定スル所ニ於テ之ヲ取扱ハシム

第四條 登記所ノ位置及其管轄ノ區域ハ司法大臣之ヲ定ム

第五條 登記官吏ハ登記事務取扱ニ付テハ始審裁判所長ノ監督ヲ受クルモノトス

第六條 登記簿ニ登記ヲ爲サ、ル地所建物船舶ノ賣買讓與賃入書入ハ第三者ニ對シ法律上

其効ナキモノトス

第七條 地所建物船舶ノ賣買讓與賃入書入ニ付キ登記ス可キ概目左ノ如シ

第一 地所ハ郡區町村名、字、番地、地目、反別若クハ坪數、地券面ノ價格

第二 建物ハ郡區町村名、字、番地、地目、構造、種類、建坪、造作ノ有無

第三 西洋形船舶ハ汽船、風帆船ノ區別、船名、番號、登簿噸數、公稱馬力、汽機及汽罐ノ種

類、端船其他必要ノ所屬品

第四 日本形船舶ハ船名、番號、積石數、間數、端船其他必要ノ所屬品

第五 登記ノ事由

參照ノ部 〇登記法ニ關スル事

第六 金額

第七 質入書入ハ其期限及利息

第八 所有者及登記ヲ受クル者ノ氏名住所

第九 一筆ノ地所又ハ一棟ノ建物ヲ區別シ賣買讓與質入書入ヲ爲ストキハ其事實

第十 二番以後ノ書入ヲ爲シ又ハ書入ニ爲シタルモノ質入ト爲シ質入ニ爲シタルモ

ノヲ書入ト爲ストキハ其事實

第十一 登記ノ年月日

第八條 登記ヲ請フ者アルトキハ登記官吏直ニ前條ノ概目ヲ審査シテ登記簿ニ登記シ本人ニ之ヲ示シ又ハ讀聞セタル上本人ヲシテ署名捺印セシメ且之ニ署名捺印ス可シ

第九條 地所建物船舶ニ關スル差押假差押差留假差留假處分及地所建物ノ收益差押ニ付テハ裁判所ノ命令書ニ依リ登記簿ニ其記入ヲ爲ス可シ

前項ノ記入ハ裁判所ノ命令アルトキニ非サレハ之ヲ取消スコトヲ得ス

第十條 登記ハ第十五條第二項及第十六條第十七條第十八條ヲ除クノ外契約者雙方ノ請求若クハ裁判所ノ命令アルトキニ非サレハ之ヲ爲シ又ハ變更シ又ハ取消スコトヲ得ス

第十一條 登記ノ原本又ハ拔書又ハ一覽ヲ要スル者ハ其登記所ニ出頭シテ之ヲ請求スルコトヲ得

第十二條 登記官吏ノ職務執行上ニ關シ不服アル者ハ管轄始審裁判所ニ抗告スルコトヲ得

第十三條 登記ニ關スル取扱ノ手續及登記簿ノ書式ハ司法大臣之ヲ定ム

第二章 賣買讓與

第十四條 地所建物船舶ノ賣買讓與ニ付テハ登記ヲ請フトキハ契約者雙方出頭シ其證書ヲ示ス可シ

前項ノ場合ニ於テ其物件質入書入中ニ係ルトキハ買受人讓受人ニ於テ之ヲ了知セル旨ヲ申出其記入ヲ請フ可シ

第十五條 家督相續ニ因リ地所建物船舶ノ登記ヲ請フトキハ雙方出頭シ其證書ヲ示ス可シ
死亡者失踪者若クハ離縁戸主ノ遺留シタル地所建物船舶ヲ相續スル者登記ヲ請フトキハ親屬又親屬ナキトキハ近隣ノ戸主二名以上連署ノ書面ヲ差出シ且證明書類アルモノハ之ヲ示ス可シ

第十六條 行政官廳ノ公賣處分ニ因リ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者登記ヲ請フトキハ落札證書及其代金完納ノ證書ヲ示ス可シ

第十七條 官有ノ地所建物船舶ノ拂下又ハ無代價下渡ヲ受ケ登記ヲ請フトキハ其指令ノ本書若クハ證書ヲ示ス可シ

第十八條 民有ノ地所建物船舶ヲ官有ト爲シタルトキハ其官廳ハ第七條ノ概目ヲ示シテ登

參照ノ部 〇登記法ニ關スル事

記ヲ求ム可シ

第十九條 裁判執行上ノ釋賣若クハ入札ニ因リ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者アルトキハ裁判所ノ命令ニ依リ其登記ヲ爲ス可シ

第二十條 地所船舶賣買讓與ノ登記ヲ受ケ地券鑑札ノ下付若クハ書換ヲ請ントスル者ハ登記所ヨリ登記簿ノ證ヲ受ク可シ

第三章 質入書入

第二十一條 地所建物船舶ノ質入書入ニ付キ登記ヲ請フトキハ契約者雙方出願シ其證書ヲ示ス可シ

貸借ノ爲メニ非スシテ義務ヲ果ヌ可キ保證ノ爲メ地所建物船舶ヲ質入書入ト爲シ其登記ヲ請フ者モ亦前項ノ規定ニ依ル可シ

第二十二條 書入ノ地所建物船舶ヲ重テ書入ト爲ストキハ第二債主ニ於テ之ヲ了知セル旨ヲ申出共記入ヲ請フ可シ書入ト爲リタル地所ヲ質入ト爲シ又ハ質入ト爲リタル地所ヲ書入ト爲ストキモ亦同シ

第二十三條 質入書入契約ノ全部若クハ一部ノ解除又ハ變更ニ付キ登記ヲ請フトキハ契約者雙方出願シ其證書ヲ示ス可シ

第二十四條 同一ノ地所建物船舶ニ付キ數個ノ登記ヲ爲ストキハ其登記ヲ請フ日時ノ前後

ニ因リ登記ノ順序ヲ定ムルモノトス

第四章 登記料及手数料

第二十五條 地所建物船舶賣買ノ登記ニ付テハ其買受人左ノ賣買代價ノ區別ニ從ヒ每一件

ニ其登記料ヲ納ム可シ

五圓未滿	五錢
拾圓以上	拾錢
拾圓未滿	貳拾五錢
貳拾五圓以上	五拾錢
貳拾五圓未滿	壹圓
五拾圓以上	貳圓
五拾圓未滿	三圓
百圓以上	四圓
百圓未滿	五圓
貳百圓以上	六圓
貳百圓未滿	七圓
三百圓以上	
三百圓未滿	
四百圓以上	
四百圓未滿	
五百圓以上	
五百圓未滿	
七百五十圓以上	
七百五十圓未滿	
千圓未滿	

参照ノ部 七〇登記法ニ關スル事

千五百圓以上	八圓
千五百圓未滿	九圓
千圓未滿	拾圓
五百圓以上	拾貳圓
五百圓未滿	
壹萬圓以上	

以上五千圓マテ毎ニ貳圓ヲ增加ス

第二十六條 地所建物船舶讓與ノ登記ニ付テハ其讓渡人讓受人ニ於テ時價相當ノ價格ヲ定メ前條ニ掲グル金額ノ區別ニ從ヒ毎一件ニ其讓受人ヨリ登記料ヲ納ム可シ

第二十七條 地所建物船舶質入書入ノ登記ニ付テハ其質入人書入人ハ第二十五條ニ掲グル金額ノ區別ニ從ヒ毎一件ニ其登記料ノ半額ヲ納ム可シ但一件ニ付キ金五錢ヨリ下スコトヲ得ヌ

第二十八條 第二十一條第二項ノ登記ニ付テハ價格ヲ定メ前條ノ例ニ依リ其登記料ヲ納ム可シ

第九條 第一項ノ記入ニ付テハ其價格ノ定マリタル物件ハ其價格又其價格ノ定マラサル物件ハ時價相當ノ價格ヲ定メ前條ノ例ニ依リ其登記料ヲ納ム可シ

第二十九條 第十五條ノ登記ニ付テハ時價相當ノ價格ヲ定メ第二十五條ニ掲グル金額ノ區別ニ從ヒ毎一件ニ其登記料ノ五分一ヲ納ム可シ但一件ニ付キ金五錢ヨリ下スコトヲ得

ヌ

第三十條 左ニ掲クル者ハ手数料トシテ金五錢ヲ納ム可シ

第一 登記事件ノ取消又ハ其變更ノ登記ヲ請フ者ハ毎一件

第二 登記ノ謄本若クハ披書ヲ請フ者ハ毎一枚

第三 登記ノ一覽ヲ請フ者

第三十一條 左ニ掲クルモノハ登記料及手数料ヲ要セス

第一 官廳ノ請求ニ係ル登記

第二 公立ノ學校病院公園及養育院ニ係ル登記

第三 社寺堂宇及墳墓地ニ係ル登記

第四 人民共有ノ用惡水路溜池敷堤敷井溝敷及公衆ノ用ニ供スル道路ニ係ル登記

第三十二條 登記所ニ於テ第二十五條第二十六條第二十八條第二項及第二十九條ニ從ヒ届出タル價格ヲ不相當ト認ムルトキハ其事件ニ關係ナキ者三名ヲ選ヒ之ヲ評價人ト爲シテ其價格ヲ評定セシム可シ

第三十三條 評價人ノ評定シタル價格届出ノ價格ヨリ増加スルトキハ其評價ニ關スル費用ハ其登記料ヲ納ムル者之ヲ負擔ス可シ若シ其價格届出ノ價格ト同價又ハ低下ナルトキハ該費用ハ其登記所ニ於テ之ヲ支辨ス可シ

第三十四條 評價人ニ選ハレタル者ハ正當ノ事由ナクシテ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第三十五條 評價人ノ日當ハ登記所ノ見込ヲ以テ一日金貳拾錢ヨリ五拾錢マテヲ給ス可シ

第五章 罰則

第三十六條 詐偽ノ所爲ヲ以テ登記料ヲ減脱シ及之ニ通謀シタル者ハ二圓以上百圓以下ノ

罰金ニ處ス

第三十七條 本法ニ依リ罰金ニ處スル者ハ刑法ノ不諭罪及減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

附則

第三十八條 明治十年第二十八號布告船舶買賣書入質手續同十三年第五十二號布告土地買賣讓渡規則同十四年第三十號布告地券證印稅則其他從前ノ法律規則中本法ニ抵觸スルモノハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

第三十九條 地所買賣讓與荒地起返開墾鐵下年期明等總テ地券下付書換ニ係ル手續及其手数料ハ大藏大臣之ヲ定ム

第四十條 登記所ノ登記簿ニ未タ登記セサル地所建物船舶ニ付キ登記ヲ請フ者ハ地所建物ハ其所在地船舶ハ其定繫場ノ戶長ノ證書ヲ以テ其所有者タルコト及其物件ニ故障ナキコトヲ示ス可シ

第四十一條 本法ハ明治二十年二月一日ヨリ之ヲ施行ス

(二)

法律十九年八月十日第二號

公證人規則

第一章 總則

第一條 公證人ハ人民ノ囑託ニ應シ民事ニ關スル公正證書ヲ作ルヲ以テ職務ト爲ス

第二條 公證人ハ法律命令ニ背キタル事件ノ公正證書又ハ他ノ官吏ノ作ル可キ公證書類ヲ作ルコトヲ得ス若シ之ヲ作リタルトキハ公正ノ効ヲ有セス

第三條 公證人ノ作リタル公正證書ハ完全ノ證據ニシテ其正本ニ依リ裁判所ノ命令ヲ得テ執行スルカアルモノトス但刑事裁判所ニ偽造ノ訴アルトキハ其證書ノ執行ヲ中止ス可シ又民事裁判所ニ偽造ノ申立アルトキハ其證書ノ執行ヲ中止スルコトヲ得

第四條 公證人ハ治安裁判所ノ管轄地ヲ以テ受持區トシ其區内ニ於テ司法大臣ノ認可ヲ受ケタル町村内ニ住居シ其居宅ニ役場ヲ設ケ役場ニ於テ職務ヲ行フ可シ但役場外ニ住居セントスルトキハ管轄始審裁判所ノ認可ヲ受ク可シ

已ムヲ得サル事件ニ付テハ受持區内ニ限リ役場外ニ於テ其職務ヲ行フ可シ

第五條 各區内公證人ノ員數ハ司法大臣之ヲ定ム

第六條 公證人ハ司法大臣ニ隸屬シ控訴院長始審裁判所長ノ監督ヲ受クルモノトス

第七條 公證人其受持區内ニ於テハ區外人ノ爲メニモ職務ヲ行フ可シ但受持區外ニ於テハ

參照ノ部 て○登記法ニ關スル事

何人ノ爲メニ職務ヲ行フコトヲ得ス若シ之ヲ行ヒタルトキハ其書類ハ公正ノ効ヲ有セス
第八條 公證人ハ理由ナクシテ人民ノ囑託ヲ拒ムコトヲ得ス若シ之ヲ拒ミタルトキ囑託人
ノ求メアレハ其理由ヲ記シテ渡ス可シ

第九條 公證人ノ職務執行上ニ關シ不服アル者ハ管轄始審裁判所ニ抗告スルコトヲ得

第十條 公證人ハ公證人何某ト刻シタル方六分ノ役印ヲ作り其印鑑ニ氏名ヲ手書シ之ヲ管
轄始審裁判所及治安裁判所ニ差出ス可シ

前項ノ印鑑ヲ差出サハル間ハ職務ヲ行フコトヲ許サス若シ之ヲ行ヒタルトキハ其書類ハ
公正ノ効ヲ有セス

第十一條 公證人已ムヲ得サル事故アリテ職務ヲ行フコト能ハサルトキハ近隣ノ公證人ニ
代理ヲ囑シ管轄始審裁判所ニ其旨ヲ届出可シ

第十二條 公證人ハ筆生ヲ置キ書類ヲ作ル補助ヲ爲サシムルコトヲ得

第十三條 公證人ノ作ル證書及謄本ノ用紙ハ其始審裁判所管内公證人役場ト刻シタル野紙
ヲ用フ可シ

第十四條 公證人ノ取扱フ可キ書類左ノ如シ

第一 原本 證書ノ本紙ニシテ公證人ノ保存スルモノ

第二 正本 原本ノ全文ヲ記シタルモノニシテ本文義務ノ執行ヲ裁判所ニ願出可キ旨ヲ

其末尾ニ記載シタルモノ

第三 抄録正本 原本ノ一部分ヲ記シ其末尾ニ前項ト同一ノ記載アルモノ

第四 正式謄本 原本ノ全文ヲ寫シタルモノニシテ原本ニ代ヘ得可キモノ

第五 抄録正式謄本 原本ノ一部分ヲ抄寫シタルモノニシテ原本ニ代ヘ得可キモノ

第六 謄本 原本ノ全文ヲ寫シタルモノ

第七 抄録謄本 原本ノ一部分ヲ抄寫シタルモノ

第八 見出帳 日々授受シタル書類ノ番號種類等ヲ順次ニ記入スルモノ

第十五條 原本其他書類ノ本署ハ役場ニ之ヲ保存シ他ノ官吏ノ公證ヲ受クル爲メノ外裁判
所ノ命令ニ依ルニ非サレハ役場外ニ出スコトヲ得ス

第十六條 裁判所ノ命令ニ依ルノ外關係外ノ者ニ書類ノ謄本ヲ渡ス可カラス

第十七條 公證人ハ其取扱ヒタル公證事件ヲ漏洩ス可カラス

第二章 公證人ノ選任及試験

第十八條 公證人タル可キ者ハ左ノ件々ヲ具備スルヲ要ス

第一 滿二十五歳以上ナル事

第二 身元保證金ヲ管轄始審裁判所ニ差入ル、事

第三 定式試験ノ及第證書ヲ有スル事但裁判官檢察官タリシ者及法學士法科大學卒業生

参照ノ部 て○登記法ニ關スル事

代行人ハ此條件ヲ要セス

第四 丁年者二名以上ニテ其品行ヲ保證スル證書ヲ有スル事

第十九條 保證金ノ額ハ土地ノ狀況ニ從ヒ貳百圓以上五百圓以下ニ於テ豫メ司法大臣之ヲ定ム

第二十條 左ニ掲クル者ハ公證人タルコトヲ得ス

第一 公權剝奪若クハ停止中ノ者

第二 盜罪詐僞罪賄賂收受ノ罪及贓物ニ關スル罪ヲ犯シ刑ヲ受ケタル者

第三 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

第四 官吏懲戒令ニ依リ免職セラレタル者

第二十一條 公證人ヲ試験スル場所及期日ハ司法大臣之ヲ定メ少クモ二箇月前ニ告示ス可シ

第二十二條 試験委員ハ控訴院若クハ始審裁判所ノ裁判官二名檢察官一名トシ司法大臣臨時之ヲ命ヌ

第二十三條 試験ノ科目ハ公證人規則、民法、訴訟法、商法其他公證人ノ職務ニ關スル法律命令トス

第二十四條 公證人ヲラント欲スル者ハ願書ニ試験及第證書ノ寫ヲ添ヘ管轄始審裁判所若

クハ控訴院ヲ經テ司法大臣ニ差出ヌ可シ但裁判官檢察官タリシ者ハ其官記法學士ハ其學位記法科大學卒業生ハ其卒業證書代行人ハ其免許狀ヲ以テ及第證書ニ代フルコトヲ得

第二十五條 公證人ハ司法大臣之ヲ任ヌ

第二十六條 試験ノ方法ハ筆記口述ノ二種トス筆記試験ニ合格セサル者ハ口述試験ヲ受クルコトヲ得ヌ

第二十七條 試験及第者ニハ及第證書ヲ授與ス

第三章 證書

第一節 證書ノ原本

第二十八條 公證人證書ヲ作ルニハ其囑託人ノ氏名ヲ知り面識アルヲ必要トシ且丁年者一名ノ立會人ヲ要ス之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

公證人囑託人ノ氏名ヲ知ラス面識ナキトキハ其本籍或ハ寄留地ノ郡區長若クハ戶長ノ證明書又ハ公證人氏名ヲ知り面識アル丁年者二人以上ヲ以テ其人ヲ證セシム可シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第二十九條 左ニ掲クル者ハ立會人タルコトヲ得ヌ

第一 公證人及囑託人ノ親屬雇人又ハ公證人ノ筆生

第二 第二十條ニ掲ケタル者

參照ノ部 ○登記法ニ關スル事

第三十條 證書ニハ其本旨ノ外左ノ件々ヲ記載ス可シ

第一 囑託人及立會人ノ族籍住所職業氏名年齡

第二 囑託人代理人ナルトキハ委任狀ヲ所持シタルコト及其本人ノ族籍住所職業氏名年齡

第三 囑託人後見人ナルトキハ後見人タルノ證書ヲ所持シタルコト及其本人ノ族籍住所職業氏名年齡

第四 郡區長戸長ノ證明書ヲ以テ證シタルトキハ其旨又證人ヲ要シタルトキハ其族籍住所職業氏名年齡

第五 證書ヲ作リシ場所及其年月日若シ場所ヲ記セス又ハ年月日ノ記入ヲ遺脱シタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十一條 證書ヲ作ルニハ普通平易ノ語ヲ用ヒ字畫明瞭ナルヲ要ス
接續ス可キ字行ニ空白アルトキハ墨線ヲ以テ之ヲ接續ス可シ

第三十二條 度量衡貨幣ノ數量名稱及曆法ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ之ヲ記ス可シ
既ニ廢シタル度量衡貨幣曆法又ハ外國ノ度量衡貨幣曆法ヲ記セサルヲ得サル場合ニ於テハ之ヲ用フルコトヲ得

第三十三條 證書ニ追加改正ヲ爲ストキハ其文字並ニ何行ニ追加改正ヲ爲シタルコトヲ欄外又ハ末尾ノ餘白ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ又文中消字ヲ爲ストキハ其原字ノ尙ホ明カニ讀得可キコトヲ要ス且何行ニ若干字ヲ消シタルコトヲ欄外又ハ末尾ノ餘白ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ追加改正消字ノ効ヲ有セス

第三十四條 證書ヲ作リタルトキハ關係人ニ讀聞セ其旨ヲ記入シ然ル後ニ公證人並ニ關係人各自署名捺印シ公證人ハ其治安裁判所管内某地住居ト肩書ス可シ
公證人並ニ關係人ノ署名捺印ナキトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十五條 證書ノ綴目合目ニハ公證人並ニ囑託人之ニ捺印ス可シ
若シ署名スル能ハサル者アルトキハ明治十年第五十號ノ布告ニ從フ可シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ其公正ノ効ヲ有セス

第三十六條 公證人ハ自己及親屬ノ爲メニ證書ヲ作ルコトヲ得ス其親屬他人ノ代理人タルトキモ亦同シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十七條 公證人若シ囑託人ノ爲メ訴訟代人若クハ代言人ト爲リ又ハ爲リタルコトアルトキハ其訴訟事件ニ付キ證書ヲ作ルコトヲ得ス之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十八條 公證人ハ自己親屬立會人又ハ證人ノ爲メニ利益アル條件ヲ證書中ニ記ス可カ

ヲス若シ之ヲ記シタルトキハ其條件ハ無効トス

第三十九條 公證人ハ證書ノ原本ヲ保存ス可シ若シ之ヲ保存セズ又ハ亡失シタル場合ニ於テ第四十七條ノ手續ヲ爲サハルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セズ

第四十條 囑託人若シ代理人又ハ後見人ナルトキハ其委任狀又ハ其證書ノ寫ヲ原本ニ連續ス可シ其寫ニハ本書ト對照シ相違ナキ旨ヲ附記シ公證人並ニ關係人署名捺印シ其寫ト本書トニ割印ス可シ

第四十一條 證書ニ關係ノ書類ハ之ヲ原本ニ連續スルコトヲ得之ヲ連續シタルトキハ其旨ヲ原本ノ欄外又ハ末尾ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ

第四十二條 原本ニハ證券印稅規則ニ定メタル印紙ヲ貼用ス可シ

第二節 正本及謄本

第四十三條 正本ハ數量ノ定リタル金錢其他換用物若クハ有價證券ノ支辨ニ限り權利者ノ請求ニ依リ之ヲ渡ス可シ之ニ違ヒタルトキハ正本ノ効ヲ有セズ

正式謄本及抄録正式謄本ハ權利者ノ請求ニ依リ之ヲ渡ス可シ

第四十四條 正本又ハ正式謄本ハ原本ト同時ニ又ハ原本ヲ作リタル後ニ於テ之ヲ作ルコトヲ得原本ト同時ニ作ルトキハ關係人ノ面前ニ於テシ原本ヲ作リタル後ニ作ルトキハ更ニ義務者ノ立會ヲ以テス可シ義務者出席セザルトキハ正本又ハ正式謄本ヲ求ムル者ヨリ管

轉始審裁判所ニ出願シ其命令ニ依テ他ノ公證人一員又ハ裁判所ノ裁判官檢察官又ハ書記一員ノ立會ヲ以テ之ヲ作ル可シ之ニ違ヒタルトキハ其効ヲ有セズ

裁判所ノ命令ニ依テ正本又ハ正式謄本ヲ作リタルトキハ其末尾并ニ原本ノ末尾ニ其旨ヲ附記シ其命令書ハ之ヲ原本ニ連續ス可シ

第四十五條 正本又ハ正式謄本ヲ作ルトキハ第三十一條第三十三條第三十四條第三項及第三十五條ノ規定ニ依ル可シ

正本又ハ正式謄本ニハ權利者ノ氏名並ニ之ヲ作リタル年月日及場所ヲ記シ公證人並ニ義務者署名捺印ス可シ前條第一項ノ場合ニ於テハ公證人及他ノ公證人又ハ裁判所ノ官吏署名捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ其効ヲ有セズ

第四十六條 正本又ハ正式謄本ヲ渡シタルトキハ原本ノ末尾ニ其旨ト年月日トヲ附記シ權利者ノシテ署名捺印セシム可シ

第四十七條 正本又ハ正式謄本ハ原本ノ亡失シタルトキ管轄始審裁判所ノ認可ヲ經之ヲ原本トシテ保存ス可シ

第四十八條 數事件ヲ列記シ數人各自ニ關係ヲ異ニスル證書ハ權利者ノ請求ニ依リ其有用ノ部分ヲ抄録シテ正本又ハ正式謄本ヲ作ルコトヲ得

正本又ハ正式謄本ヲ渡シタル者ニハ更ニ抄録正本又ハ抄録正式謄本ヲ渡ス可カラズ又抄

録正本又ハ抄録正式謄本ヲ渡シタル者ニハ更ニ正本又ハ正式謄本ヲ渡ス可カラズ之ヲ渡
スト雖モ其効ヲ有セス

第四十九條 正本又ハ正式謄本ハ管轄始審裁判所ノ命令アルニ非サレハ再度之ヲ渡スコト
ヲ得ス之ヲ渡スト雖モ其効ヲ有セス

再度以上正本又ハ正式謄本ヲ得ント欲スル者ハ其事由ヲ具シテ管轄始審裁判所ニ願出ツ
可シ管轄始審裁判所ハ原本ヲ保存スル公證人ニ其正本又ハ正式謄本ヲ渡スコトヲ命
スルコトアル可シ

其正本又ハ正式謄本ニハ幾度ノ正本又ハ正式謄本ナルコトヲ末尾ニ附記シ公證人署名捺
印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ其効ヲ有セス

第五十條 抄録正本又ハ抄録正式謄本ハ總テ正本又ハ正式謄本ト同一ノ手續ニ依リ之ヲ作
ル可シ其効力モ亦同シ

第五十一條 證書ノ謄本及其附屬書類ノ寫ハ關係人ノ求メニ應シ之ヲ渡ス可シ

第五十二條 謄本ニハ原本ノ全文ヲ寫シ其末尾ニ謄本ト記シ公證人署名捺印ス可シ

第五十三條 抄録謄本ニハ原本ノ年月日及囑託人ノ族籍住所職業氏名ヲ記シ末尾ニ抄録謄
本ト記シ公證人署名捺印ス可シ

第五十四條 管轄始審裁判所ノ命令ニ依リ關係外ノ者ニ謄本ヲ渡シタルトキハ其命令書ヲ

原本ニ連續シ末尾ニ命令書ヲ受ケタル旨並ニ年月日ヲ附記シ受取人ヲシテ署名捺印セシ
ム可シ

第三節 見出帳

第五十五條 公證人ハ見出帳ヲ作り記入前管轄始審裁判所ニ差出シ綴目合目ニ其所長ノ官
印ヲ受ク可シ

第五十六條 見出帳ニハ日々取扱ヒタル書類中ヨリ第三十一條及第三十三條ノ規定ニ從ヒ
左ノ件々ヲ記入ス可シ

第一 囑託人ノ住所氏名

第二 書類ノ番號種類

第三 書類ヲ取扱ヒタル年月日

第四節 兼任及書類ノ授受

第五十七條 公證人死去失踪免職辭職轉職又ハ他ノ役場ニ轉シテ直ニ後任者ノ命セラレサ
ル場合又ハ停職ノ場合ニ於テハ管轄始審裁判所ハ近隣ノ公證人ニ命シテ其事務ヲ兼任セ
シム可シ

役場ヲ廢シタルトキハ書類ノ引繼ヲ近隣ノ公證人ニ命ス可シ

第五十八條 前條ノ場合ニ於テ兼任者ナキトキ其他必要ト見認ムル場合ニ於テハ管轄始審

参照ノ部 〇登記法ニ關スル事

裁判所ハ直ニ其役場ノ書類ニ封印ヲ爲ス可シ

第五十九條 公證人免職辭職又ハ他ノ役場ニ轉シタル場合ニ於テハ後任者又ハ兼任者ハ前任者ト立會ヒ書類ノ提要目錄ヲ作り共ニ署名捺印シテ授受ス可シ

死去失踪其他ノ事故ニ因リ引渡人ナキ場合ニ於テハ後任者又ハ兼任者ハ管轄始審裁判所ノ官吏ト立會ヒ提要目錄ヲ作り受取ル可シ

書類封印後ニ命セラレタル後任者又ハ兼任者ハ管轄始審裁判所ノ官吏ト立會ヒ封印ヲ解キ提要目錄ヲ作り受取ル可シ

後任者又ハ兼任者ハ提要目錄ヲ作りタル日ヨリ一月以内ニ其目錄ノ寫一通ヲ管轄始審裁判所ニ差出ス可シ

第六十條 公證人停職ノ場合ニ於テハ兼任者ハ第五十九條ノ手續ヲ爲スニ及ハス書類ノ保存ハ停職者之ヲ擔當ス可シ

兼任者ハ停職者ノ役場ニ於テ其職務ヲ行フ可シ

第六十一條 兼任者引繼ノ書類ヲ更ニ他ノ公證人ニ引渡ストキハ其命ヲ受ケタル日ヨリ三日以内ニ自己ノ引繼キタルトキノ目錄ニ依テ引渡ヲ爲シ其始末書ヲ作り受繼人ト共ニ署名捺印ス可シ

受繼人ハ始末書ヲ作りタル日ヨリ一日以内ニ其寫一通ヲ作り管轄始審裁判所ニ差出ス可シ

シ

第六十二條 停職者復任スルトキハ管轄始審裁判所ヨリ兼任者ニ解任ヲ命ス可シ

第六十三條 前任者ノ作りタル原本ニ依テ後任者正本又ハ謄本ヲ渡ストキハ其受繼人タル旨ヲ附記ス可シ

兼任者ノ作りタル原本ニ依テ兼任者正本又ハ謄本ヲ渡ストキハ兼任者タル旨ヲ附記ス可シ

第四章 手数料及旅費日當

第六十四條 公證人ハ此章ニ定メタル程限ニ從ヒ囑託人ヨリ手数料及旅費日當ヲ受クルコトヲ得

第六十五條 手数料ハ原本一枚ニ付キ貳拾五錢正本及謄本ハ一枚ニ付キ拾錢但一行二十字二十行ヲ以テ一枚トシ十行以上ハ一枚十行以下ハ半枚ヲ以テ算ス

第六十六條 囑託人ノ求メニ依リ先ツ證書ノ草案ヲ渡シ後其原本ヲ作りタルトキハ草案ノ手数料ヲ別ニ請求スルコトヲ得ス但其原本ヲ作ラサルトキハ原本手数料ノ半額ヲ受クルコトヲ得

第六十七條 公證人其役場ヨリ一里以外ノ地ニ往テ職務ヲ行フトキハ往返トモ旅費トシテ一里毎ニ貳拾錢ヲ受クルコトヲ得其職務ヲ行フ爲メ或ハ災變ノ爲メニ其場所又ハ途中ニ

参照ノ部 〇登記法ニ關スル事

滞留スルトキハ日當七拾錢ヲ受クルコトヲ得

第六十八條 兼任者本任者ニ代リテ職務ヲ行フトキハ其手数料ハ總テ兼任者之ヲ受ク可シ

第六十九條 手数料ノ外證券印紙並ニ罫紙ノ代價ハ囑託人ヨリ之ヲ受クルコトヲ得

第七十條 囑託人ノ求アルトキハ手数料等ノ計算書ヲ與フ可シ

第七十一條 手数料等ニ係リ争ノ生シタルトキハ其金額ニ拘ハラヌ管轄始審裁判所ニ訴フ可シ

第五章 懲罰

第七十二條 公證人此規則ヲ犯シタル時ハ管轄始審裁判所ニ於テ第七十二條ヨリ第七十六條マテニ定メタル規定ニ依リ處分ス可シ

第七十三條 左ノ違犯ハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ過料ニ處ス

第八條ニ違ヒタル時

第十一條ニ違ヒタル時

第十三條ニ違ヒタル時

第二十條ノ第一第二第三第四ノ規定ニ違ヒタル時

第三十一條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時

第三十二條ノ第一項ニ違ヒタル時

第三十四條ノ第一項ニ違ヒ讀聞セシコトヲ記入セス又ハ肩書ヲ爲サ、リシ時

第三十五條ニ違ヒタル時

第四十條ニ違ヒタル時

第四十一條ニ違ヒタル時

第四十二條ニ違ヒタル時

第四十四條ノ第二項ニ違ヒタル時

第四十六條ニ違ヒタル時

第五十二條ニ違ヒタル時

第五十三條ニ違ヒタル時

第五十四條ニ違ヒタル時

第五十五條ニ違ヒタル時

第五十九條ノ第四項ニ違ヒタル時

第六十一條ニ違ヒタル時

第六十二條ニ違ヒタル時

第七十四條 左ノ違犯ハ二圓以上五圓以下ノ過料ニ處ス

第四十三條ニ違ヒタル時

參照ノ部 〇登記法ニ關スル事

第四十四條ノ第一項ニ違ヒタル時
 第四十五條ノ第二項ニ違ヒタル時
 第四十八條ノ第二項ニ違ヒタル時
 第四十九條ノ第一項又ハ第三項ニ違ヒタル時
 第七十五條 左ノ違犯ハ五圓以上三十圓以下ノ過料ニ處ス
 第二條ニ違ヒタル時
 第七條ニ違ヒタル時
 第十條ノ第二項ニ違ヒタル時
 第二十八條ニ違ヒタル時
 第三十條ノ第五ノ規定ニ違ヒタル時
 第三十二條ニ違ヒタル時
 第三十四條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時
 第三十六條ニ違ヒタル時
 第三十七條ニ違ヒタル時
 第三十八條ニ違ヒタル時
 第三十九條ニ違ヒタル時

(三)

第七十六條 左ノ違犯ハ一月以上四月以下ノ停職ニ處ス
 第四條ノ第一項ニ違ヒタル時
 第十五條ニ違ヒタル時
 第十六條ニ違ヒタル時
 第十七條ニ違ヒタル時
 第七十七條 公證人前數條ニ掲ケタル懲罰處分ニ對シ不服アルトキハ管轄控訴院ニ抗告ス
 ルコトヲ得但抗告ハ其處分ノ執行ヲ停止スルノ効力ナキモノトス
 第七十八條 公證人停職ニ當ル所爲三度ニ及ヒタルトキハ司法大臣其職ヲ免ス
 第二十條ノ第一第二第三ニ記載シタル處分ヲ受ケ又ハ身許保證金ヲ差入レサルトキ亦前
 項ニ同シ
 第七十九條 公證人此規則ヲ犯シタルニ依リ他人ニ損害ヲ生セシメタルトキハ之ヲ賠償ス
 可シ
 司法省告示 十九年十二月
 四日第七號
 本年法律第一號(一)ヲ以テ登記法創定セラレタルニ付テハ明治十五年第六十號布告公證猶豫
 願ノ手續ハ明治二十年二月一日以後消滅スヘキヲ以テ地所建物船舶ニ對シ假差押ヲ爲サン
 ト欲スル者ハ管轄裁判所ニ其請求ヲ爲スヘキモノトス

〔參照〕

太政官布達 十七年三月十

七日第五號

明治十五年十二月二十六拾號布告ハ勸解又ハ刑事告訴中ナルヲ以テ公證猶豫申立ツル者アル

場合ニモ適用スヘキモノトス

布告 十五年十二

月第六十號

戸長ニ於テ地所建物船舶賣買讓渡及ヒ質入借入ノ公證ヲ爲スヘキ際該物件又ハ所有主ノ身分ニ關シ既ニ訴訟ヲ起シ公證猶豫ノ儀申立ル者アル時ハ其裁判ヲ執行シ得ヘキ迄公證ヲ爲スヘキヲス

司法省令 十九年十一月

九日甲第三號

今般法律第一號(一)第二號(二)ヲ以テ登記法及ヒ公證人規則制定相成候ニ付其抗告手續左ノ通

之ヲ定ム

抗告手續

第一條 登記官吏又ハ公證人ノ職務執行ニ關シ抗告ヲ爲ス者ハ抗告狀ヲ其登記官吏又ハ公證人ニ差出ヌ可シ

第二條 登記官吏又ハ公證人抗告狀ヲ受取リタル日ハ其翌日ヨリ三日以内ニ意見ヲ附シ且ツ關係書類ノ寫ヲ添ヘ抗告狀ヲ管轄始審裁判所ニ送致ヌ可シ

(四)

第三條 登記官吏又ハ公證人若シ前條ノ期限内ニ抗告狀ヲ管轄始審裁判所ニ送致セザルトキ又ハ急速ヲ要スル場合ニ於テハ抗告者ハ直チニ管轄始審裁判所ニ抗告狀ヲ差出ヌコトヲ得

始審裁判所ハ抗告ヲ受ケタル登記官吏又ハ公證人ヲシテ意見書ヲ差出サシメ及ヒ關係書類ヲ求ムルコトヲ得

第四條 登記官吏又ハ公證人ハ其職務執行上ニ關シ抗告ヲ受ケタルトキハ其處分ヲ停止ヌ可シ

第五條 抗告狀ヲ受取タル管轄始審裁判所ハ書面ニ依リ判定ヲ爲ヌ可シ

始審裁判所ハ必要ナリト認ムル場合ニ於テハ抗告者其他關係人ニ書面ヲ以テ答辨セシムルコトヲ得

第六條 始審裁判所ハ抗告ノ判定書ヲ管轄始審裁判所ニ送致シ之ヲ登記官吏又ハ公證人及ヒ抗告者ニ送附セシム可シ

始審裁判所ニ於テ抗告ヲ正當ナリト判定シタルトキハ登記官吏又ハ公證人ハ其判定ニ依リ處分ヲ更正ヌ可シ

第七條 公證人懲罰處分ニ對シ不服アル者ハ其處分ノ翌日ヨリ起算シ七日内ニ其處分ヲ爲シタル管轄始審裁判所ニ抗告狀ヲ差出ヌ可シ

裁判所ハ其抗告ヲ正當ナリト認ムルトキハ速ニ其不服ノ點ヲ更正メヘシ若シ之ヲ正當ナ

參照ノ部 〇登記法ニ關スル事

ラスト認ムルハ第二條ノ期日内ニ意見ヲ附シ關係書類ヲ添ヘ抗告狀ヲ管轄控訴院ニ送致ス可シ

第八條 公證人懲罰處分ニ對スル抗告ニ付テモ亦第三條ノ手續ニ依ルコトヲ得

第九條 公證人懲罰處分ニ對スル抗告狀ヲ受取タル控訴院ハ第五條ノ手續ニ從ヒ判定ヲ爲ス可シ

第十條 控訴院ハ其判定書ヲ處分ヲ爲シタル始審裁判所ニ送致シ之ヲ言渡サシム可シ

控訴院ニ於テ抗告ヲ正當ナリト判定シタルトキハ處分ヲ爲シタル始審裁判所ハ其判定ニ依リ處分ヲ更正ス可シ

第十一條 抗告ノ判定ニ對シテハ總テ上訴ヲ爲スヲ得サルモノトス

司法省令 十九年十二月 二日甲第四號

登記所ノ位置及ヒ管轄區域別表ノ通之ヲ定ム(別表)

(六) (五)

司法省令 十九年十二月 三日甲第五號

本年八月法律第一號(一)ヲ以テ登記法制定ニ付明治二十年二月以後登記ヲ乞フ者ハ左ノ手續ニ依ル可シ

第一條 登記ヲ乞フ者ハ第一號書式ニ準シ登記ノ件目等ヲ記載シ實印ヲ押シタル名刺ヲ登記所ニ差出ス可シ

登記簿ノ原本若クハ拔書又ハ登記簿ノ閲覧ヲ請フ者亦全シ

第二條 後見人ヨリ登記ヲ乞フトキハ後見人タルノ證書ヲ登記所ニ差出ス可シ代人ヲ以テ登記ヲ請フトキハ代理ノ委任狀ヲ付與シ之ヲ登記所ニ差出サシム可シ

第三條 初メテ登記ヲ請フ者ハ第二號書式ニ準シ區戸長ノ證明シタル印鑑ヲ登記所ニ差出ス可シ

第四條 地所ニ付キ初メテ登記ヲ請フ者ハ地券ヲ登記官ニ示ス可シ但現ニ質入中ノ地所ニ付テハ此限リニアラス

船舶ニ付テハ鑑札ヲ示ス可シ但船舶ニ釘付シタルモノハ此限ニ在ラス

第五條 建物ニ付登記ヲ乞フトキハ其圖面ヲ登記所ニ差出ス可シ

建物ノ圖面ハ邸内ノ形狀、坪數(段別)方位及ヒ建物ノ形狀、間尺、位置等ヲ記シ登記ヲ受ケ可キ建物ノ圖ハ墨引墨字ト爲シ登記外ナル建物アルトキハ其圖ハ朱引朱字ト爲ス可シ

建物ノ圖面ニハ登記法第九條第十六條第十七條第十八條第十九條ノ場合ヲ除クノ外、結約者雙方之ニ署名捺印ス可シ但全第十五條第二項ノ場合ニ於テハ親屬又ハ近隣戸主之ニ連署ス可シ

地所船舶ニ付キ圖面アルトキモ亦前項ニ定メタル署名捺印若クハ連署ヲ要ス

第六條 地所ヲ分割シテ賣買讓與シ又ハ質入書入ト爲ストキハ前條ニ準シ其圖面ヲ差出ス可シ

參照ノ部 七〇登記法ニ關スル事

第七條 裁判執行上ノ標賣若クハ入札ニ因リ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者其登記ヲ乞ヒ又ハ地所建物船舶ニ關スル差押假差押差留假處分及地所建物ノ收益差押ニ付記入若クハ取消ヲ乞フニハ裁判所ヨリ其命令書ヲ受ケ之ヲ登記所ニ示ス可シ
裁判書渡ニ依リ登記變更若クハ取消ヲ乞フトキ亦前項ニ全シ

第八條 登記法第三十二條ニ依リ評價ヲ要スルキハ登記所ノ命令ニ從ヒ登記料ヲ納ムル者ヨリ評價費用ノ見積金額ヲ豫納ス可シ

第九條 登記簿ノ證ヲ乞フ者ハ第三號書式ニ準シ物件等ヲ記載セル願書ヲ登記所ニ差出ス可シ
第十條 登記ヲ受ケタル物件ノ全部若クハ一部毀壞燒失流亡等ニ依リテ消滅シタルトキハ其物件ノ所有者ヨリ登記ヲ爲タル登記所ニ書面ヲ以テ其旨ヲ届出ツ可シ但其物件質入書入又ハ差押差留等ニ係ルトキハ債主又ハ差押差留等ノ權利者ノ連印ヲ要ス
地目變換ノ場合ニ於テモ亦前項ノ例ニ準シ届出ヲ爲ス可シ

第十一條 船舶ノ定置所ヲ更改シタルトキハ原登記所ヨリ登記簿ノ謄本ヲ受ケ之ヲ轉入地ノ登記所ニ差出シ其登記ヲ乞フ可シ

同一ノ登記所ニ屬スル町村ニ轉入シタル場合ニ於テハ其登記所ニ登記ノ變更ヲ乞フ可シ
(書式略之)

(あ) ○代理人後見人ニ關スル事

(一)

司法省布達 十四年十二月二日甲第八號

大審院諸裁判所々屬代理人規則別紙ノ通相定候條此旨布達候事

(別紙)

所屬代理人規則

第一條 治罪法中所屬代理人ト稱スルハ大審院及ヒ各裁判所々在地ニ住居スル免許代理人ヲ云フ

第二條 裁判官ノ職權ヲ以テ撰任シタル代理人辯護人ハ正當ノ事由ヲ證明スルニ非サレハ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第三條 代言又ハ辯護受任中代言免許満期ニ至リ引續營業セス又ハ廢業スト雖モ該事件終結ニ至ルマテ其代言辯護ヲ擔當ス可シ

第四條 代言又ハ辯護受任中ハ他ノ訴訟事件ヲ以テ其任ヲ闕クコトヲ得ス

第五條 裁判官ノ職權ヲ以テ代理人辯護人ヲ撰任シタル場合ニ於テモ其謝金ハ被告人之ヲ擔當ス可シ

總テ謝金ニ付テハ出訴スルコトヲ許サス

太政官布達 十七年一月廿四日第一號

詞訟又ハ勸解ニ付已ムヲ得ス代人ヲ出サントスル者ハ親屬又ハ相當ノ者ヲ撰ミ管轄裁判所

參照ノ部 ㊦○代理人後見人ニ關スル事

(二)

(三)

ノ許可ヲ受ク可シ但代人タル者同時ニ二人以上ヨリ二件以上ヲ受任シ其他不適當ノ所爲アリト認ムル時ハ裁判所ニ於テ之ヲ差止ムルコトアル可シ
内務省達 十六年七月十八日 番外府縣へ

後見人職務權限ノ義ニ付別紙ノ通太政官へ相伺御指令相成候條爲心得此旨相達候事

(別紙)

伺 十六年五月三十日

後見人規則發布ノ義ハ目下急施ヲ要スル事項ニ付客年四月十三日上稟シタル旨趣モ有之就テハ伺出ノ府縣へ追テ一般ノ法律制定相成マテ地方從來ノ慣習ニ依リ可取扱旨指令及ヒ來候處爾後後見職務ノ權限伺出ル府縣夥多有之抑後見人ハ當初親族ニ於テ撰任シタルモノナレバ常ニ監察スヘキ方法モ無之ニ付規則御制定マテ不動産賣買讓渡質書入等ニ限リ其證書又ハ願書ニ親族連署ノ上ナラテハ戸長ニ於テ公證ヲ與ヘサル様相定メ其旨指令及ヒ度右ハ未タ成規モ無之此段相伺候也

指令 十六年五月三十日

伺之趣聞届候事

(六) ○外國人ニ關スル事

内務省達

十四年一月卅一日(第五號) 祝賀府縣(東京府ヲ除ク)

(一)

警察上外國人取扱規則詮議ノ次第有之ニ付將來設施スヘキモノハ勿論已ニ設施ノ分ト雖モ至急取調更ニ當省へ稟議可致此旨相達候事

太政官達

十四年十二月十五日(第百五號)

外國人ノ遵奉スヘキ行政規則設立候節ハ自今外務省ト叶議上施行可致此旨相達候事

司法省內達

十六年一月十三日 各裁判所へ

本邦在留ノ朝鮮人犯罪アルキハ我法律ヲ以テ處分可致ハ固ヨリ當然ノ事ナルモ其重罪ニ該ル可キ者ハ本省へ經伺ノ上處斷可致此旨相達候事

但輕罪ニ該ル者ハ處分濟ノ上其都度可届出候事

太政官達

十四年六月十六日(第百五十三號) 省院使廳府縣へ

各廳ヨリ我國在留各國公使ニ對スル公務ノ照會ハ外務卿へ通牒シ外務卿ヨリ各國公使へ照會候儀ト可相心得此旨相達候事

太政官達

七年百廿五號

外國政府并外國人民ヨリ我政府ニ對スル詞訟ハ外務省ニ於テ取調候旨明治六年(第二百八十九號)ヲ以テ相達置候處向後外國政府并外國人ヨリ我政府ニ對スル訴訟ハ都テ司法省ニ於テ取調裁判可及候條此旨相達候事

(七) ○内訓伺ニ關スル事

參照ノ部 (一) ○外國人ニ關スル事 (二) ○内訓伺ニ關スル事

(五)

(四)

(三)

(二)

(一)

司法省達 十五年十二月二十二日丙部三拾五號

新法實施日猶淺キヲ以テ當省指令内訓等實際注意ヲ要ス可キ件ハ總テ爲心得可致通牒候條
此旨豫メ相達候事

司法省達 十五年五月五日丙部
十九號警視廳府廳

内訓條例別紙ノ通大審院諸裁判所へ相達置候處其廳府縣ニ於テモ法律上ノ疑義ニ付テハ該
達ニ照依シ内訓ヲ請フコトヲ得ヘシ此旨相達候事

大審院長

諸裁判所各檢事

今般内訓條例別紙ノ通相定候條此旨及内達候事

司法省大木喬任

明治十五年二月二十四日

内訓條例

第一條 凡内訓條例ハ司法卿ト各裁判所(裁判官檢事)トノ間ニ於テ用ユル處ノ内規ニシテ
專ラ情實疎通事理伸暢ノ爲メニ設クルモノナリ故ニ此條例ニ從フモノハ尋常何指令ノ効
カアラサルモノトス

但何指令ハ各其職務ノ權限ニヨリ發令スルモノナリ該條例ハ職權ニ不拘唯其注意ヲ要

スル爲メニ發スルモノナルニヨリ必シモ準據セサルヘカラサルノ効カアラストス

第二條 凡民刑上疑問疑獄且裁判百般ノ事情其注意ヲ要スルモノハ總テ此ノ條例ニ從フヘ
シ

第三條 凡此條例ニ從テ裁判官ヨリ司法卿ニ請フモノハ末文内訓ヲ請フト書シ尋常何文ニ
殊別スヘシ

第四條 凡此條例ニ從テ司法卿ヨリ各裁判所へ致スモノハ末文内訓ニ及ト書シ尋常ノ指令
ニ殊別ス

第五條 凡裁判所ニ於テ尋常ノ何トシテ出スモノト雖モ司法卿ニ於テ内訓トナスヘク見込
トキハ本文内訓ニ及トナシ又内訓ヲ請フトシテ出スモ指令トナスヘシト見込ムトキハ末
文指令ニ及トナシ還付必シモ原文ヲ改作セシムルヲ要セム簡便ニ從フヲ以テ旨トスレハ
ナリ

第六條 内訓ハ指令ノ効力ナシト雖モ其從フヘカラサルモノハ其事由ヲ詳悉シ再ヒ之ヲ請
ヒ反覆數回妨ケナキヲ以テ其定ムル所ヲ待ヘシ亦事理伸暢ノ意ナリ
司法省達 十五年四月二十五日丙
第十七號警視廳府廳

大審院并ニ裁判所へ別紙ノ通及内訓候ニ付爲心得此旨相達候事

大審院

(三)

参照ノ部 ○内訓何ニ關スル事

裁判所

從來法律上ノ疑義何謂訓等十條ヲ一通ニシテ差出シ又ハ簡條ヲ設ケスシテ數十項ノ條件ヲ列記スル者モ有之取調方不都合不尠候ニ付今後ハ總テ簡條ヲ設ケ十簡條以上ニ涉ル時ハ各通ニシテ差出スヘシ此旨及内訓候事

(抄) 〇雜

司法省訓令 十九年四月三十日第一號警視廳
北海道廳府縣(東京府ヲ除ク)へ

爾後各地方ノ便宜ニ基キ司法警察ニ關スル細則ヲ設ケントスルトキハ其地始審裁判所檢事ト協議ノ上告達スヘシ

司法省訓令 十九年六月廿一日第
十號檢事長檢事へ

新聞紙條例第三十三條ニ傍聽ヲ禁シタル訴訟ノ辯論ハ之ヲ記載スルコトヲ得ストアルハ公判ノ半ヨリ傍聽ヲ禁シタル場合ト雖モ總テ其訴訟ノ當日ノ辯論ヲ記載スルコトヲ得サル儀ニシテ裁判官傍聽ヲ禁スルノ命令ヲ爲シタル時ヨリ以下ノ辯論ノミヲ指スモノニ非ス右ハ往々疑義ヲ生シ候向モ有之趣ニ付此旨心得ヘシ

同 十六年十二月廿六日神戶始
審裁判所檢事ヨリ司法省へ

新聞紙主編輯人條例ニ違反シ體刑ニ處セラレ上告保釋中尙ホ其新聞ニ署名スルヲ得ルヤ直ク其指令ヲ待ツ

(一)

(二)

(三)

指令 十六年十二月廿八日

新聞紙主編輯人上告中新聞ニ署名スルヲ得ルヤノ件同ノ趣右ハ署名スルヲ得ル義ト心得ヘシ

(四)

司法省達 十五年八月二十二日丁第
四十四號大審院裁判所へ

廢戶主并財產管理ノ義ニ付左ノ通太政官ヨリ御達相成候條此旨爲心得相達候事

司法省

廢戶主并財產管理ノ義ニ付別紙之通内務省ヨリ同出朱書ノ通及指令候條其旨爲心得諸裁判所へ可相達候事

明治十五年八月十四日

太政大臣三條實美

同 十五年五月十九日

別紙尙根縣令同ノ趣審按候處第一條受刑者廢戶主ノ義ハ去ル明治十年中法制部ニ質問ノ上一年以上ノ懲役ニ處セラレ一家營生難相立場合ニ於テハ戶主ヲ廢スルヲ許可致來候處今般新刑法御實施ニ付爾後ハ舊例ニ準據シ輕重禁錮一年以上ノ處刑ヲ受ケ一家生計難相立者ニ限り父母若クハ親屬叶議ノ上廢戶主出願スレハ開届不苦候哉又其第三條禁治産ノ處分ヲ受ケタル者ノ財產管理ハ曩日上申致置候通リ後見人規則御設定相成候上同規則ニ據リ可取扱心得ニ有之候ハ其第四條管理ノ職ニ任スヘキ家族親戚ナキ者ハ戶長ヲシテ財產保管セシ

參照ノ部 抄〇雜

六百十五

メ其負債償却等ハ總テ裁判處分ニ歸セシメ候テ可然哉同縣伺書之相添此段相伺候也

(朱書)

指令 十五年八月十四日

伺之趣左ノ通可相心得事

第一條 廢戶主ノ儀ハ伺ノ通

第三條 財産管理人ノ義ハ受刑者ヲシテ家族又ハ親戚ノ内ニ就テ之ヲ撰定セシメ其姓名ヲ

管轄裁判所ニ届出置キ他日賣買貸借等ノコアルトハ都テ該所ノ處分ヲ仰カシムヘシ

第四條 戶長管理ノ義ハ伺之通

司法省達 十五年四月十七日 丙第十五號府縣へ

各府縣限リ布令スル條則届出方ノ義明治六年第六十二號同八年第三十號ヲ以テ相達置候處

自今其府縣ヨリ管内始審裁判所及ヒ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ通牒シ且ツ其年一月ヨリ

三月迄ノ分四月廿日限取纏メ以下之ニ準ヒ一ヶ年四度ニ取纏メ當省へ可届出候條此旨更ニ

相達候事

司法省達 十五年四月十七日 丁 第廿七號裁判所へ

各府縣限リ布令スル條則届出方ノ義明治八年第三十號同九年第五十六號ヲ以テ相達置候處

今般丙第十五號前ノ通府縣へ相達候ニ付自今當省へ届出ニ及ハヌ又始審裁判所ヨリハ本管

(五)

(六)

控訴裁判所へモ届出ニ不及候條此旨更ニ相達候事

司法省達 十五年一月十六日 丁第七號裁判所へ

從來裁判所ヨリ管内一般ノ人民へ達スヘキ事件ハ其旨ヲ地方官ニ移シ府知事縣令ノ名ヲ以テ布令スヘキ筈ニ有之候處或ハ裁判所長ノ名ヲ以テ布令スヘキ案文ヲ附シ達方地方官へ照會候向モ有之哉ニ相聞候右ハ都テ從前ノ手續ニ從フヘキ義ト心得ヘシ爲念此旨相達候事

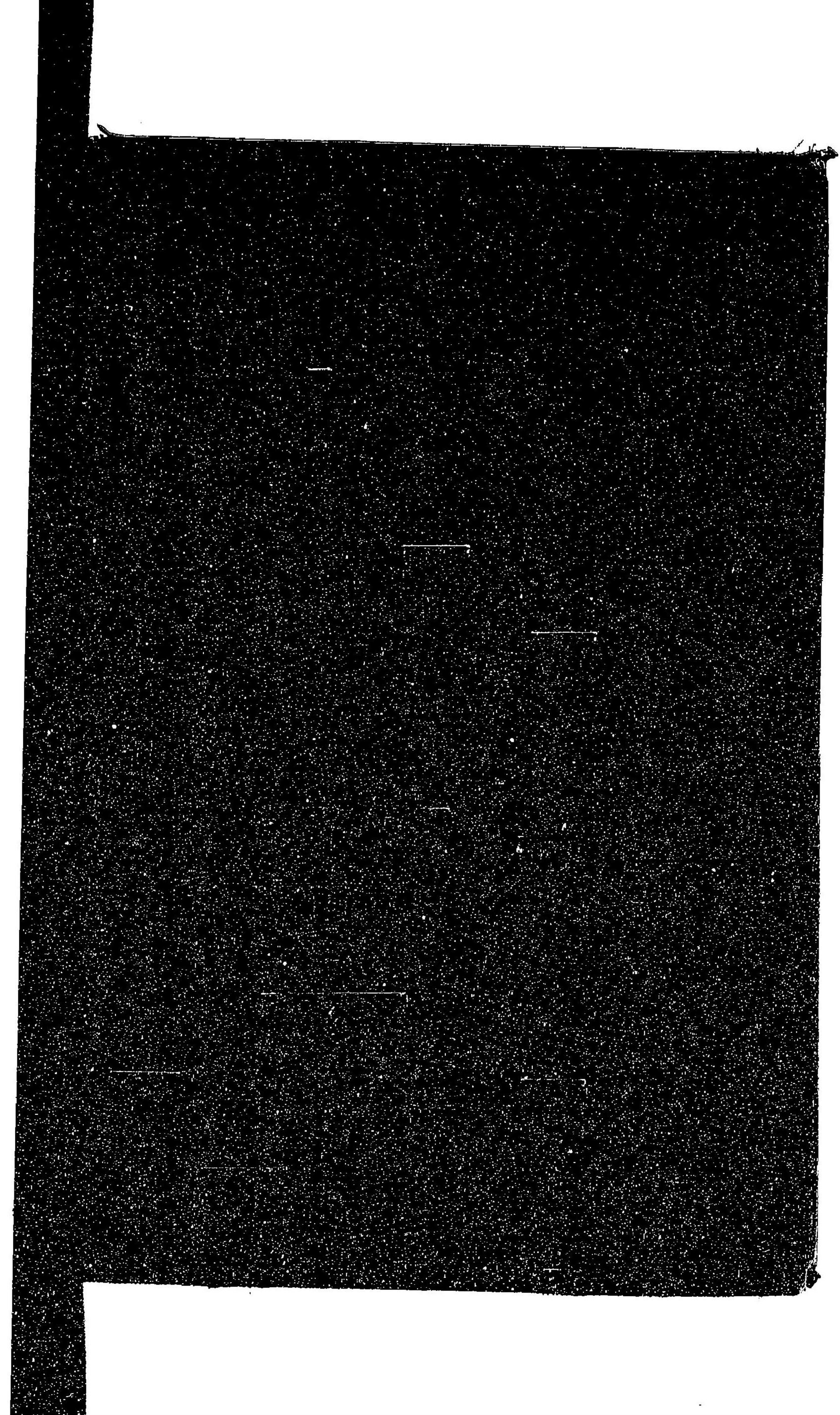
明治二十年三月八日版權屆

(定價壹圓三十拾錢)

警視廳藏版

發	行	所
東京銀座四丁目 博聞本社	大坂備後町四丁目 全分社	千葉縣下千葉町 全分社
	埼玉縣下浦和驛 全分社	福岡縣下博多中間町 全分社

33
5
267





禁電子式複写

035575-000-1

CZ-711-082

刑事要例類纂

警視庁

2

M20

BBP-0123



